Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「中国大学図書館担当者訪日交流 2015」
訪日感想文

公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

※原文は、全て中国語です。

本を媒介とした文化の使者、友情の架け橋
日本科学協会寄贈図書関連文化交流イベント雑記

哈爾浜医科大学図書館　図書館　館長　曲章義

2015 年 6 月 28 日から 7 月 5 日にかけて、「2015 年中国大学図書館責任者訪日交流団」に参加し再び日本科学協会に表敬訪問を行いました。滞在中は明治大学、東洋文庫、東京工業大学、公立はこだて未来大学、北海道大学などの図書館を見学して、そして「日中大学図書館フォーラム 2015」に出席しました。日本科学協会から図書の寄贈を受けた図書館第一陣 10 館に含まれる図書館の責任者として日本科学協会の表敬訪問をしたのは 3 度目です。同協会の図書寄贈事業が引き続き深みを増しつつ規模も拡大していること、新たな文化交流事業も打ち出し続けていることを目の当たりにしてきました。かいつまんで言うと、同協会は本を媒介にして、中日の文化交流の使者、中日友好をつなぐ架け橋となっています。ここで同協会の図書寄贈事業などの文化交流活動を簡単に振り返り、同事業の将来の発展について管見を示したいと思います。

一、日本科学協会が始めた日中文化交流事業

1. 中国の大学に対する図書寄贈事業

日本科学協会は日本財団の援助のもと、中国の教育部から支持を受けて 1999 年に「教育・研究図書有効活用プロジェクト」を始め、中国の大学図書館および学術研究機関に対する図書の寄贈計画を展開してきました。第一陣に選ばれた 10 館は日本語専攻を置く大学の図書館で、東北 3 省が主体でした。中日双方の努力によりこの事業は 16 年も順調に続いており、寄贈先は当初の 10 館から現在は 53 館まで拡大し、中国の大部分の地区に広がって、大学の種類も多様化しています。日本科学協会では向こう数年で寄贈先を 100 館まで増やす計画とのことです。寄贈図書は 16 年間の累計で 340 万冊を超えているため、1 年に平均 20 万冊以上が贈られていることになります。これらの図書は寄贈先図書館が単独で陳列し、全学の読者に開放しており、あるべき効果を発揮しています。特に大連外国語大学図書館では寄贈された書籍がより幅広く高度に利用されています。

2. 寄贈先中国大学図書館スタッフの訪日交流

図書寄贈事業がベースとなって、2001 年、日本科学協会が寄贈先中国大学図書館責任者の訪日を手配し、訪日団は寄贈元や一部の大学を見学しました。図書寄贈の流れ、利用について知り、中日の大学図書館で学術、管理、文化面での交流ができました。今年までにこうした訪日交流活動は 6 回あり、参加する図書館も当初 10 館だったのが今年は 32 館に拡大し、参加者数は累計 90 人にのぼります。

3. 笹川杯日本知識クイズ大会

2004 年 11 月、日本科学協会がハルビンで「笹川杯日本知識クイズ大会」を始めました。その後、笹川杯日本知識クイズ大会は東北、華東、南西などの地区で催されています。 2011 年には全国規模にまで拡大しました。今までに大会は 10 回あり、日本知識クイズ大会には毎回各地区で 370 校以上から 1000 人を超える選手が参加しています。今年 11 月には吉林大学でも開催される予定です。

4. 日本科学協会は 2008 年 4 月から中国青年報社、人民中国雑誌社との共催で年に一度の中国語と日本語の『笹川杯・感知日本』懸賞作文コンクールを行っています。これまで 7 年実施されており、受賞作品は

2 年ごとに編集出版されています。「第 1 集」は 2008 年、2009 年の作品で、「第 2 集」は 2010 年、2011 年の作品です。

二、提案

1. 寄贈先を 100 館に拡大する際の選定では、寄贈先の地域分布、教育機関の分類を適宜考慮し、高等職業学校、高等専科学校、専門系単科大学を含めるよう努力すること。
2. 寄贈先が寄贈図書のふるい分けと宣伝を強化し、有効利用をより確かなものにすること。
3. 日本科学協会の中国向け図書寄贈事業などの文化交流事業について年表を作成し、各イベントの時期、人物、場所、事項などを詳しく記録すること。
4. 中国から日本への図書寄贈事業も展開すること。現在の流れはすべて日本から中国へとなっていますが、今回、山元町みんなの図書館に代表団が図書を寄贈したイベントから、日本も中国を知り感じる必要があると思ったのです。日本人のうち中国の国情を知らない人の比率は中国人のうち日本の国情を知らない人の比率と対比できるものでしょう。交流、理解、感知はいずれも双方向で多面的であるべきです。

上述した日本科学協会の展開する日中文化交流事業およびその実施過程では、同協会が確かに中日の文化交流の使者、中日友好をつなぐ架け橋梁となっていることが分かります。

お礼

今回の訪問、見学、フォーラムを手配してくださった日本科学協会に感謝しております。会見と講話を頂いた日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島美恵子会長、ありがとうございました。中村常務理事、顧文君さん、宮内さん吉田さんを初めとする日本科学協会の皆さんの周到な計画、緻密な手配、細やかな配慮にも感謝しております。私個人の海産物アレルギーに配慮していただき、一行の食事の手配でもお手数をおかけしました。陳進団長、訪問団の皆さんにもお世話になりました。今回のイベントで結ばれた深い友情を心に銘じます。改めて、ありがとうございました。

日本訪問の収穫

黒龍江大学図書館　副館長　燕金武

日本を訪れたのは初めてです。今回の交流学習を通じて日本に対する感性での認識ができ、収穫がたくさんありました。まず日本は環境が優美なこと。特に北海道の山紫水明と密生する森林を見て、日本国民がとても環境を重視していると感じました。次に日本国民は総合的な素養がとても高く雅やか上品で礼儀正しいこと。特に北海道のレジャー施設では、喫煙室に監視の目がないのに吸い殻がまったく落ちていませんでした。加えて、利用したツアーバスで出たごみも分類して包んでいました。また、日本では都市と農村のギャップがとても小さいと感じました。訪れた農村地区では大通りがきちんとしていて、耕地にアスファルト道路の通っているところまでありました。最後に、東京の路上でも交通渋滞を見かけませんでした。

いくつかの大学図書館と東洋文庫の見学を通しての感想はたくさんあります。

まず図書館が読者を中心にしており、家具の設計やレイアウトに読者の利便性が考慮され、本棚の高さも読者に都合よく設計されていました。また、訪問したすべての図書館で、読者サービスエリアでは大声で話をしないよう、読者の写真を撮らないようにと注意がありました。読者が電話しやすいようにと専用の防音

室を設けてある大学図書館もありました。読者は図書館でWIFIと有線ネットワークを無料で使うことができます。

次に分かったことは、各大学の図書館の経費には余り開きがないことです。中国国内では各大学の図書館の経費にはとても大きな開きがあり、特に勤務先である黒龍江大学このような地方の大学では、本学の経費が逼迫しているため図書経費が正常な教育研究の需要を満たせなくなってしまっています。

最後に、興味を持ったのは、はこだて未来大学の打ち出している学習スペースです。学生の学習と討論に都合よく、学習指導を担当する高学年の学生もおり、しかもそうした学習指導には指導証明書も出されているそうで、見るもの聞くものがすべて新鮮でした。

訪日研修視察での収穫

黒龍江東方学院　図書館　館長　霍灿如

日本財団の援助のもと、日本科学協会の招待に応じて、中国大学図書館訪日代表団の一行35人が、2015年6月25日～7月5日、日本の訪問交流を行いました。今回の訪日が実用性重視で、日中大学図書館フォーラムを行ったことは将来の大学図書館建設にとても役立つものだと思います。訪日代表としてこのフォーラムに参加し、大学図書館 4 館の視察を行ったことで、多くのものが得られました。

1、日中大学図書館フォーラムでの収穫

1.1、フォーラムの概要：千葉大学の副学校長兼図書館館長の「未来の大学図書館の新しいモデル」、上海交通大学図書館館長の「未来の大学図書館のモデルチェンジと変革についての考え」、筑波大学図書情報学准教授の「情報管理の発展する方向」、北京大学図書館副館長の「北京大学図書館の世界一流に向けた発展計画の概要」、東京工業大学附属図書館館長の「大学図書館のデジタル化の発展と評価」、大連理工大学図書館館長の「日本科学協会の大連地区への寄贈図書および提案」。

1.2、収穫その１、図書館は大きな共有空間だということです。開放された透明で広々とした空間であり、椅子などの設備はどれも移動可能で、大小を自由に組み合わせられ、大小のさまざまな共有空間により教員や学生の需要を満たし、学習するには図書館だと教員や学生に知らせています。

1.3、収穫その２、図書館は教員と学生の相互交流に適した場所だということです。図書館の中で、教員と学生は互いにより多い知識を得ることができます。雰囲気が調和した心地良い環境により、非常に楽しいものとなるのです。随所のコンピューターBookTree によりショーウインドーの展示、展覧がどこでも見られます。また、館員が教員、学生と一体になって、教材の編纂、カリキュラム内容案内、学生との交流を行う効果はとても良好です。

1.4、収穫その３、図書館は自由に討論できる空間だということです。移動できる机と椅子の組み合わせで大小さまざまなスペースが作れるので、人数が少ないときは小さく多いときは大きくでき、とても便利で自習する学生も満足できます。調べによると、千葉大学図書館は2012年の入館者数が52万人でしたが、2015年の半年で60万人に達しています。

1.5、収穫その４、図書館は発展する有機体だということです。図書館+教育は、どのように図書館のサービスを教育に組み込んで、インターネット+専門課程を利用して学生の専門知識習得を助けるか、モバイル図書館+スマートフォンで学生にサービスを展開するかという取り組みです。

1.6、収穫その５は図書館+科学研究の取り組みです。インターネット+共有空間を利用して、特徴的デー

タベースナレッジベースにより教員に研究のガイドを提供するというものです。

1.7、収穫その６（六）はＩＴを活用したユビキタス教室です。インターネット+学生のユビキタス教室を利用して、専門知識と教養を学び、大学生の素養を高める取り組みです。

1.8、収穫その７は購入文献資源に対する評価、分析モデルを作り、自動的に蔵書データを分析し、大学の方針決定に供する取り組みです。

フォーラムではまた世界トップクラスの学術雑誌が値上がりしていることについての対策が示され、未来の図書館における紙の書籍と電子書籍の経費の割合についての討論も行われました。現在では紙 7:電子 3 ですが、将来はこの比率を逆転させるといった話です。

2、大学図書館 4 館を見学して東日本大震災の被災地である山元町とみんなの図書館を訪問しました。

2.1、明治大学和泉図書館、東京工業大学図書館、北海道大学図書館と公立はこだて未来大学図書館を見学しました。図書館の建築面積はいずれもあまり大きくないものの、内部が広々として明るく、セントラルエアコンで、床には防音のフローリングや絨毯が敷かれ、本棚は使いやすく配置されており、テーブルと椅子はさまざまな造型で移動できるものでした。コンピューターやマルチメディア端末は、柱の側や部屋の隅、どこにも見られました。入退室ゲート、自動貸出返却機、複写機、プリンターは各フロアにありました。各室はガラスで仕切られているため、透明で中の様子が見えました。学習スペース、討論スペースは互いに呼応しています。エリアごとにさまざまな形のソファーや植物が配置され、学生が非常に満足できるすばらしい環境が作り出されており、どの館にもカフェや各種の飲料自動販売機があり、休憩所のソファーで寝る学生が見られました。

2.2、大地震の被災地、山元町への訪問は深く印象に残りました。当地のお寺の住職によると、この街は海から近く、津波がやってきたときは海水が十数メートルもの高さになり、ものすごい勢いで山元町に襲いかかり、街をすべて破壊してしまったため、住民全員が被災したそうです。幸いに難を逃れた住職は大地震の全過程を語ってくれました。地震の災害は非情でしたが、世界中の善良な人々が再建計画に援助の手を差し伸べてくれたそうです。中国の大学やその関係者個人からも日本へ約 730 万円の募金が寄せられました。

2.3、山元町みんなの図書館は忘れがたい印象を残しました。みんなの図書館は簡易な小屋で、各地から寄付された本を収蔵しており、館長が一人で管理しています。館長は、被災後に図書館を再建する意味とは政府に新しい図書館を建てさせることだと教えてくれました。今回、代表団は同館に『三国志』などの児童書を寄贈しました。

3、日本財団と日本科学協会への表敬訪問を行いました。

視察交流期間中はずっと日本財団、日本科学協会の幹部から心のこもったもてなしと親切な配慮を頂いていました。日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島美恵子会長ならびに中村常務理事が訪問団の全員と会見し、顧文君さん、宮内さん、吉田さんは解散まで随行してくれました。大島会長によると、1999 年以来、中国の 54 大学に寄贈してきた図書は 340 万冊にのぼるそうです。黒龍江東方学院が頂いたのは 18 万冊で、全体の 5.29%を占めています。団長を務める上海交通大学図書館の陳進館長が団員を代表して、日本財団と大島会長、中村常務理事、顧文君さん、宮内さん、吉田さんに心からの感謝を述べました。

４、学ぶべき点と参考になる点

4.1、視察した図書館はいずれも 1 つ以上の共有空間を備え、学生のさまざまな需要を満たしていました。図書館は動的、透明、活発な、大学生の好んでいく場所なのです。

4.2、視察した図書館はどこもオートメーション管理、セルフ貸出・返却を行っており、RFID 技術、イン

ターネット、新しいメディアの利用が随所に見られました。

4.3、すべての図書館で専門スタッフがとても少数でした。4～5 人しかいない館もあり、最多でも十数人で、主に学生の指導、リファレンス、文献利用トレーニングなどを行っており、残りの業務は大学生が行っていました。

4.4、日本科学協会の図書寄贈事業スタッフはまじめで仕事ぶりが厳格で、時間の手配にすきがなく、仕事を少しもいい加減にしない精神には学ぶべき価値があります。

日本訪問の雑感

延辺大学図書館　館長　玄英哲

図書寄贈事業の受け入れ先大学図書館代表として、日本科学協会のお招きにあずかり 2015 年 6 月 28 から 7 月 5 日までの期間で交流訪問に参加してきました。

日本科学協会に念入りなスケジュールと周到なお世話を頂き、明治大学、東洋文庫、東京工業大学、被災地の宮城県山元町、公立はこだて未来大学、北海道大学などを訪れ、東京工業大学では「日中大学図書館フォーラム」に参加しました。また日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島美恵子会長との会見もしていました。

今回の訪問を通じて日本の大学に勤める同業の士と幅広く交流や討議を行い、相互の理解と友情を増進できました。日本の皆さんから多くの貴重な経験を学ばせてもらい、十分な成果が得られたと思います。日本を訪れたのは二度目ですが、日本に対する理解を深めることができました。日本の高度な発達ぶり、上品さ、礼儀正しさ、仕事熱心さ、効率のよさ、勤勉さ、秩序のよさ、まじめさ、細かさが改めて印象に残っています。特に街を走る自動車の多くがハイブリッドカーだったことは印象深く、こうした環境保護意識や消費の理念は確かに手本とすべきものがあると思います。

中日両国の友誼は長い歴史を持っています。二千年を超える両国の交流の中で、両国の人々は互いに学び、手本にしあって、人類全体の文明の進歩に大いなる貢献をしてきました。日本科学協会の図書寄贈事業は 1999 年に始まってからこれまで累計 340 万冊もの本が中国の 53 大学に贈られています。勤務先の延辺大学は受け入れ先の第一陣に含まれており、寄贈を受けた図書は累計で 13 数万冊以上で、日本語図書資源の構築に大きな助けとなっています。中日両国の文化交流は、きっと双方の人材育成、科学研究、社会の進歩のために極めて大きい推進作用をもたらすと信じています。

改めて日本科学協会の長年のお力添えに感謝し、私本人に対するこのたびのご招待に感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

訪日感想

大連理工大学　図書館　館長　楊海天

日本科学協会の図書寄贈事業で中国の大学図書館代表団に随行して日本を訪れたのはもう 3 回目です。

今回の機会をくださった日本科学協会、特に道中ずっといろいろお世話になった顧先生、吉田さん、宮内さん、ありがとうございました。何度も付き添ってくださった中村常務にも

感謝しています。本当に高倉健の風格のある方でした。

今回の訪問活動はきちんと計画立てられており、スケジュールはびっしりでしたが、滞在生活の手配が行き届いていて、収穫もたくさんありました。

1. 先の 2 回と比べ、今回の訪問では「日中大学図書館フォーラム」が追加されていました。両国の大学図書館の交流が促進されただけでなく、日本科学協会が中日文化交流の絆を強める働きもより明らかになったと思います。
2. 見学、交流、旅行の中で出会った個人、団体、機関すべてが日本の文化では細部を大事にし、物事にまじめに取り組むという特徴と態度を改めて感じさせてくれました。
3. 新しい友人と出会うことができました。訪日団メンバーと交流していくことは日本科学協会の図書寄贈事業をより順調に展開する上で役に立つだろうと思っています。

   大連理工大学図書館は寄贈図書の保管と利用促進に努めていきます。またお目にかかれる機会を楽しみにしております。

訪日感想

大連外国語大学　図書館　副館長　張沢梅

2015 年 6 月 28 日～7 月 5 日、「中国大学図書館担当者訪日代表団」の一員として日本を訪れました。日本科学協会の心のこもった手配のおかげで訪問活動全体に内容が充実しており、行程はきっちり厳しいものでしたが、わずか 8 日間でたくさんの収穫がありました。

一、日本の図書館について

今回の訪問では明治大学和泉図書館、東京工業大学、公立はこだて未来大学、北海道大学を訪れ、「日中大学図書館フォーラム」に参加して、東洋文庫を見学しました。どこの大学、どこの図書館を訪れても責任者が真摯に全面的な紹介をしてから実地見学に案内してくれて、最後に対面交流と質疑応答の場を設けてくれました。こうした流れのおかげで有機的に細かく直観的に日本の大学や図書館を理解でき、日本の先進的な科学技術、成熟した規範的な図書館の管理、そして日本の図書館関係者の高い職業精神を肌で感じることができました。行程中での訪問、見学では、傾聴、観察、交流に集中していました。どの訪問先でも予期せぬ発見があり、豊かでいきいきとした体験とずっしり重い思考が毎日できていたと言えます。

今回の訪問で特に深く実感したのは、日本の図書館は入念で非常に細かい施設の配置により読者に優しいサービスを提供していることです。見学した図書館はどこも、読書環境、施設の構造、設備の配置などが重視され、喫煙室、休憩室などもよくできており、できるだけ読者に静かで心地良く便利な読書環境を作り出し、さまざまな細かいところで便宜を図っていました。これは中国の図書館にとって学ぶところが非常に大きいと思います。

二、日本財団と日本科学協会への表敬訪問

6 月 30 日午前、中国大学図書館責任者訪日代表団の一行の 35 人は日本財団ビルを訪れ、日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島美恵子会長と会見しました。その中で印象に残ったのは笹川会長が中日両国の間にある 2000 年の友好的な交流の歴史の説明と両国民が理解を深め付き合ってほしいという願望を述べられたことで、とても感動しました。帰国後、書架から笹川会長の著作『二千年の歴史を鑑として』を探し出して真剣に読み直しました。両国民族の貴い伝統ある友情と断ち切ることのできない文化、歴史のつなが

りにいっそう深く感動しました。

三、山元町の被災地とみんなの図書館への訪問

山元町の被災地とみんなの図書館への訪問は、今回の日程で一番ショックでしたが、感動も一番で、人生でも得がたい機会でした。

普門寺の住職からは津波当日の様子とそれからの再建についてのお話を伺いました。住職のお話から、震災では多くの人が巻き込まれ、街が壊され身内を亡くすなどしたことが分かりました。しかし一時の混乱が落ち着くとすべての救援活動は秩序良く展開され、多くのボランティアが普門寺の再建に手を差し伸べ、小さなみんなの図書館を建てたのだそうです。世界で最も小さく最も簡単な図書館かもしれませんが、見学者の目には心の宮殿に映りました。同館に長く勤める館長は終始笑顔で、取り乱すことも恨み言もないロぶりには温情、理解、寛容さに富んだ、生活に対する積極性が覗えました。震災のあと当地の人々は生命の意味をより深く理解し、災難を目の前にしてよりしっかりと団結したのだと肌で感じました。日本人のこれほどまで粘り強い意志、精神、決心と元に戻す力には頭が下がります。

今回の訪日活動では日本科学協会がすべて手配してくれましたが、入念な行程と厳格な仕事の態度も深く印象に残りました。日本へ発つ前に詳細なスケジュール、参加者名簿、交流の議題、天気の情況、イベントの背景資料などをもらっており、到着後には更に詳しい背景資料 2 部が渡され、宿泊先ごとの部屋割り表もありました。訪日全体の流れも厳格な合理的でむだのない設計がなされていました。特に、吉田さんが一行全員の航空機チェックインと安全検査の手続きを手伝ってから駆け足で搭乗ゲートに戻り、一人一人に手を振って別れの挨拶をしてくれた時の気持ち、あの感動はずっと忘れられないと思います。彼女が手を振るごとに、中日友好の種が私たちの心に蒔かれていきました。

今回の訪日はわずか 8 日という短い時間でしたが、空も海も青く空気のきれいな日本のすばらしい思い出はたくさんできました。日本への旅はもう終わっており、期間中の収穫、感動したこと、考えたことは書き尽くせません。思い返して考え直し、練り直していく必要がありそうです。1 粒の種となって、中日両国民の友情を伝えると同時に日本の社会、日本の図書館の優れたところを日常業務に伝えていきたいと思います。

この 8 日間のすばらしい出会いに感謝しています。

途中あなたと出会うためだけに—2015 年夏の日本訪問の感想—

遼寧師範大学図書館　副館長　朱慧

2015 年 6 月の末から 7 月の初めの 8 日間、日本科学協会のお招きにあずかり「大学図書館責任者訪日交流」に参加しました。東京都から宮城県、北海道を訪れ、行き来が慌ただしくあっという間でしたが、日程の終わるその日、何故かふと畢淑敏の『人生に一度は魂に触れる旅がある』という本を思い出しました。そうだ、この日本の旅がきっと私のこの人生で魂に触れる旅だったのだと思ったのです。

最初の訪問先は明治大学の和泉図書館でした。明治大学は 1881 年に創立された日本の有名私立大学です。中国人にとって同大学が有名なのは、周恩来元総理が 1917-1918 年の間に短期留学をしていたからかもしれません。そのため、明治大学の門をくぐると、独特な感情がこみ上げました。しかし、その留学当時まだ和泉図書館はこの世に存在していなかったのですが。

和泉図書館は 2012 年 5 月に開館し、その理念は「入ってみたいと思わせる図書館」を作り上げるという

ものだそうです。見学に同行していた館長の皆さんと、和泉図書館の各閲覧エリアをそぞろ歩くと、鳥のさえずりが聞こえ花の香りが漂っているような気分でした。開放書架が扇形に並べられ、各閲覧室はグラデーションがかかって調和した色調で、どこも塵一つなくて、気付かないうちに、明治大学のかわいいマスコットが目に入り、或いは小さな花束を目にして、自然と笑顔になれました。隅に置かれた閲覧机では、オレンジ色の暖かみある照明が、静かに読者の知識を求める目と心を照らして……私は矢も盾もたまらず国内の同僚にその写真を共有すると意図は通じ、私の感想とそっくり同じく、天国みたいだねという返事が来ました。そう、天国のような図書館でした。ここに留まってここの大学生と同じようにコーナーを選んで好きな本を読み、天国のような図書館で読書のひとときを楽しみたいと思いました。疲れたら顔を上げて窓越しにきれいな雲と中庭の緑を眺め、自分の精神を生活の歩みに追いつかせられたらと思ったのです。明治大学の先生によると、ここ数年で図書館の読者も入館人数も持続的に上昇しているそうですが、本当に意外な良い知らせでした。「入ってみたいと思わせる」和泉図書館が実現したのです。読者が来れば帰りたくなくなる知の殿堂、知の宮殿です。読書も実利追求に向かっている今、人々の心の中の図書館に対するあこがれを喚起し、本と読書の影をキャンパスの中で最も魅力的な景色にする方法について、和泉図書館は自分の方法で言葉なく思考を啓発してくれているようです。

続く日程では都市を転々として、東京工業大学図書館、公立はこだて未来大学図書館、北海道大学図書館を次々と見て回りました。これらの大学図書館はそれぞれ特色があるものの、紙面に限りがあり一つ一つ述べることはできません。驚き忘れられなかったことは、どの図書館を見学に行っても、随行してくれる先生方は例外なく微笑みを浮かべ、そっと「お静かにお願いします」「読者の撮影はしないでください」と注意してくれたことです。まるで事前に申し合わせているかのようでした。仕事上、中国国内でも省内外の他大学の図書館を視察する機会は日常的にあります。しかし私も同行者も、こんなふうに読者のじゃまをしないように静かにといった注意を受けたことはなく、撮影不可の告知をされたこともありません。携帯電話やカメラでは撮りたいものを遠慮なく撮っており、静かに本を読んでいる読者や休憩中の読者も対象外ではありませんでした。読者を前にして、自覚してかせずか私達は自分をずっと上にいる管理者だと捉えていたのです。日本の図書館を視察したのは今回が初めてですが、視察にあたってこうしたルールを耳にしたのも初めてでした。そのうち次第に、日本の図書館スタッフは何年も前からそのとおりにしていたのだと分かりました。このことで、日本の同業の士が読者に寄せる心からの尊重を悟ったのです。そう、図書館は読者のものであり、読者の天国です。本の森を散歩するもよし、知識の海を漫遊するもよし、読者の魂は自由で制約がないはずなのです。図書館の主人は読者であり、図書館スタッフである私たちは読者にサービスを提供する存在でしかないので、彼らのじゃまをする権利はありません。

今回の訪日ではちょっと特別な見学先がありました。7 月 1 日、東京から 7 時間あまりバスに揺られて訪れた宮城県仙台市の山元町です。仙台は見聞きした覚えのある地名でした。小さいときから魯迅先生の文章を学んできたので、魯迅先生が仙台で医学を学んでいたこと、そして仙台は彼が一生で最も感動し励まされた藤野先生との出会いの地でもあるという知識があったのです。しかし仙台が 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で地震と津波の甚大な被害を受けたとは思っていませんでした。特に宮城県の最南端に位置する山元町は、震災で街区全体が重傷を負い、海から 500m しか離れていない「普門寺」の損害は深刻なものだったそうです。

一行と普門寺におじゃました時、屋内に並べられた震災前後の比較写真をじっくり見て震災からもう 4 年も経っているのにと忍びなくなりました。普門寺の坂野住職が茶室の一角に通してくださったので、一経

験者としての普門寺の災害後再建の情況についてまじめにお話を伺いました。その年、大地震と津波が発生してから4日目、坂野住職は出先から急いで戻りました。普門寺は行政から危険区域に指定されていたので、ボランティアは誰も立ち入れませんでした。傷だらけの様子に直面して、住職は必ず昔の寺院を自分の手で再生させると心に誓い、一人で黙々と瓦礫の片付けを始めました。2011年5月になって、ボランティアが次々と参加したそうです。尊敬する気持ちを胸にそのお姿を見ると、ほっそりとしながら剛毅な顔立ちで、眼光の中には大いに悲しんだ後の落ち着きがありました。その痛みの日々と瓦礫の中たった一人ですべてに向き合っていた住職の気持ちは本当に想像しにくいものです。特に夜が来ると海風が悲愴に鳴く当地で、一体どんな力に支えられて一個人の力で黙々と目の前のすべてに耐えていたのでしょう。今の普門寺は、やっと簡単な修復が済んだ状態です。一つひとつの照明、窓、廊下の柱……すべて坂野住職が津波痕の廃墟から拾ってきた廃棄物を利用したもので、重々しい仏教寺院の風格はないものですが、そのとき力を合わせたものだということに尊敬の念が起こりました。実を言うと日本の正座にはまったくなじめませんでした。少しの時間で両脚がしびれてきてアリに咬まれたか針を刺されているような痛みまでしてきましたが、それでも姿勢を正して我慢しました。そうでもしないと、坂野住職、生き残った命の強靭な東日本の人々に対する敬意を表現できないと思ったからです。

普門寺を出た後、日本科学協会の顧文君先生は近くにある「みんなの図書館」を案内してくれました。その図書館を見たとき、つい口を覆ってしまいました。目も潤んでいたと思います。それまで見た中で最も小さい図書館でした。数十平米しかない仮設住宅なのです。本棚も机や椅子も簡易なものばかりでした。簡易ではありながら、図書館の中は清潔で、きちんとしていて、暖かみがありました。東日本大震災で当地の家屋は多くが津波に流され、まる4年以上経った今でも多くの地元の人が依然として路頭に迷っており、仮住まいの人や遠方の親戚に身を寄せている人も多いそうです。みんなの図書館きっと、故郷に戻る人々に疲れきった魂の休む場所を提供するため設けられたのでしょう。ここは「誰でも使える場所」です。初めて図書館の与えられた意味のために震えました。アルゼンチンの現代小説家、詩人でアルゼンチン国立図書館の館長でもあるホルヘ・ルイス・ボルヘスは以前「天国は、図書館のような姿のはずだとかねてから密かに考えている」と語っています。このすばらしい詩のような言葉は、図書館関係者には早くからよく知られてきました。壮大な建物も堂々とした気概もなく、華麗な家具もたくさんの蔵書もなく、SNSのグループに写真を共有したら旅客用の簡易トイレ図書館かと見間違われましたが、この館こそがどこよりも良くボルヘスのあの言葉を解釈していると思います。その小さな空間には愛と真心が満ちあふれ、次々とわき出る望みが託されており、すべてよくなるという固い信念まであるのですから。聖書に「愛は忍耐強い。愛は情け深い」、「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない」という言葉があります。神の愛と慈悲が山元町の人々と共にありますように。

こんな小さな図書館に館長が設けられているというのも意外でした。背丈の高くない菊地館長が人々に取り囲まれ遠くから歩いて来たとき、私は内心、被災地の図書館の館長は、これほど痛ましい悲劇を経験しているからきっと苦難のしわが深く刻まれているだろうに、平然とその目を見られるだろうかと思案していました。苦難と辛酸の姿を目にしたら感情を抑えきれず涙を落としてしまうかもしれないと不安だったのです。しかしついに館長と目が合ったとき見えたのは、信じられないことに、お日様のような笑顔でした。質素な装いに長靴を履いた彼は、まるで故郷の浙江省で日々が野良仕事をしている年かさの農民のようでした。彼はずっと快活な笑みを浮かべていましたが、実は雨の日だったので、その笑顔は垂れ込めた雲の隙間から差し込む金色の日差しのようで、心の底まで暖かく照らしてくれているとぼんやり感じました。山元町の人々

は実に質素ですが実に強靭でもあります。皆さんが積極的で楽観的に自分にできることを考えているということに私は敬服しています。私はわざと一行から遅れ、現場で通訳をしてくれていた河北省からの留学生づてにそっと１万円を差し出しました。菊地館長が最初は断るだろうと分かっていましたが、最後にはほんの気持ちを受け入れてくれたので、その善意に感謝しています。もし拒絶されたらどんなにつらかったろうと思うからです。災難を目の前にして楽観的に強靭に向き合ってきたこの日本男性は、一瞬だけ真顔になって頭を下げると、作りの粗いしおりをひとつかみ、気持ちを添えて私の手にねじ込みました。この愛のしおりはずっとずっと取っておきたいと思います。

その日の晩、仙台空港へ向かう前に、普門寺とみんなの図書館を訪問する日程の手配をしてくれた黒沢司さんとバスの車内で別れの挨拶をしました。その時に初めて知ったのですが、身長が高くなくて風采が上がらない黒沢さんは、東日本大震災で津波が起きてから日本科学協会での職を辞し、ボランティアとして山元町の災害復旧に当たってきたそうですが、四川省で汶川大地震が発生した時もはるばる救援に駆けつけてくれたのだそうです。乗り合わせた誰もが感情を抑えきれず彼に拍手を送りました。天災は無情ですが人には情があります。本当の愛に国境、民族、地域の違いはありません。

日本滞在中、一日の訪問を終えてから、短時間ながら自分でキャンパスや街を歩く自由行動の時間が取れることもありました。日本の道は太さに関わらず清潔できちんとしていて、まるで雨で洗われたようでした。近くを飛ぶように疾駆するさまざまな自動車もすべてさっぱりしており、少しの汚れもないように見えました。路上では各種の道路標識はすべてはっきり弁別でき、人々もその秩序を守っていました。通りや家の隅にはスズラン、ヒナギク、ラベンダー、アジサイなどが咲いていましたが、一か所ごとに違って同調しておらず、日本国民の美への追求を見た思いがしました。たまたま同業の先生とご一緒して街並みを見ていたり、おしゃべりに夢中になったりして、うっかり後ろを自転車で通ろうとした赤の他人をじゃましてしまったとき、申し訳なさそうに脇へよけてくれました。そもそも私が悪いのに、自転車に乗って出直す前には忘れず深く腰をかがめて頭を下げ、笑顔でお礼を言ってくれていました。ある先生がシドニーに行ったときの話を思い出しました。現地のおばあさんにオペラハウスへの道を尋ねると、道を指し示したあと、その日シドニーにはぱらぱらと小雨が降っていたので、彼が初めてシドニーに来たのだと気付いたおばあさんは穏やかに“I’m sorry for the weather”と言ったのだそうです。街が違えば物語も違いますが、同じ文明が伝わっているのですね。こうしたことは文明と呼ぶに足りないかもしれませんが、人間がこれほどすばらしいのか、人と人の心はこれほど近づけるのかと感じました。

ついでに言うと、今回の日本訪問の最終日、7 月 4 日はちょうど私の誕生日でした。日本科学協会の顧文君先生、宮内さん達が多忙な受け入れ業務の合間を縫ってわざわざ誕生日ケーキを用意してくれたので、忘れられない誕生日を過ごすことができました。歓送会がもう終わるというタイミングで吉田さんがそばに来ました。温和で物静かな吉田さんは、ショートヘアと美しい顔かたちが岩井俊二監督の映画『ラブレター』の渡辺博子を想起させます。『ラブレター』も渡辺博子もとても好きなのですが、人付き合いが苦手で恥ずかしがり屋の私は吉田さんへの好意を言い出せませんでした。吉田さんは日本女性ですが、尋常でなく流暢な英語を話していました。中国語はそれでも少し難しかったようです。私は東京工業大学を訪問した日の晩、夜風が涼しく、私達が三々五々バスを待っていたとき、吉田さんが天津外国語大学図書館の張秀華館長に簡単な中国語を習っていたのを覚えています。とても努力しているのが分かりましたが、中国語の発音は確かに難しいだろうなとも分かりました。話を送別会に戻すと、グラスを持ってそばにやってきた彼女は笑顔で何か話しかけてきました。すぐには彼女が何を言っているのか気付かなかったので、向かい合っており距離

も近いのに、吉田さんは根気強く同じ事をくり返しました。やっと聞き取れたのは中国語での「朱慧先生、誕生日おめでとうございます」だったのです。熱い気持ちがまったく無防備な心の底で湧きあがりました。その一言を中国語で言うために、疲れが溜まっていただろう夜にこっそりと何度その練習をしていたのでしょうか。

また、日本に来る前に、子供から小樽のガラス製オルゴールを頼まれていました。しかし今回の訪日はスケジュールがぎっしりで、札幌から近くの小樽に行く暇さえそもそもありません。子供との約束が反故になってしまって、子供の願いはたぶん叶えられないのだろうと思っていました。ところがまったく思いがけなかったことに、日本科学協会の中村常務が時間を捻出して、札幌市内の小樽ガラスを扱うお店に連れて行ってくれたのです。猫がコントラバスを弾いているデザインのガラス製オルゴールが子供の枕元に今あるのはそのおかげです。魅力的な音楽が鳴り響くたびに、ユーモアと面白味があって明るく親切な中村常務、私達にとっての高倉健を思い出させる方です。

よく知られている歴史問題のため、中国国民はよく日本に対して複雑な感情を持っています。夫には以前「日本への旅行は行きたいなら止めないが、一緒に行くことは期待するなよ」と言われたことがあります。学齢児童でさえ、たまたま耳にした言行から日本や日本人に対する認識が偏っていることが分かります。常々どうも何かがおかしいと思ってはいるのですが、相手が落ち着いてまじめにこちらの話を聞いてくれそうにないのに何も話のしようはありません。今回の訪日まで日本に触れ、普通の日本国民に触れたことは自分にもありませんでした。

6 月 30 日の午前、訪日団は日本財団を表敬訪問し、同財団の笹川会長と日本科学協会の大島会長にお会いしました。笹川会長は淡い色のジャケットに濃い色のスラックスを合わせた出で立ちでしたが、なんとその足元はピンクのソックスでした。ジャケットのポケットに挟んだピンクのチーフと呼応していたのが印象に残っています。しかし本当に忘れられないのは斬新でしゃれた身なりではなく、はっきりとしたその発言です。ゆっくりとした話しぶりでしたが、言葉は誠実さと理智に富んでいました。「現在の（中日）友好関係は不安定で望ましくない現象も見られはするが、国民の理解を深めてこそ双方関係の発展を促進できる。図書寄贈事業を通じてより多くの中国人に日本への理解を強めてもらいたい」と言うのです。また彼は、日本財団は決して「親日派」を育成するつもりはなく、育成するならば「知日派」を育成するとも発言しました。その瞬間、この意気軒昂な紳士は心の友だという感情が溢れ出ました。そう、日本を知る前からいかに愛や恨みを語ってもまったく空疎なものです。

日本へ発つ前にちょうど読んでいた本、『狂走日本』の作者、毛丹青は書中の『北海道のおじさんの真心』という一節で、日本に着いたばかりのまだ貧しい頃、ある豪放な北海道のおじさんが独特な方法でこの北京っ子に暖かな救いの手を差し伸べたことを書いています。毛丹青は文章の最後で「日本に二十年あまりいるが、一番好きな土地は北海道だ」と述べていますが、これは適切に私達一般人のよくある感情の状態を表した言葉です。街を気に入るのは、常にその町の人が気に入ったからであり、その街を懐かしむのは、常にその街の人が懐かしいからなのです。6 月 28 日から 7 月 5 日までの 10 日にも満たないわずかな時間に見聞きして感じ取ったのは浅く表面的ものでしかないのでしょうが、心と心で知り合って、魂と魂が近づくには、「人の群れの中でちょっと多くを見かけた」だけでいいこともあるのだと信じています。この旅で、坂野住職、菊地館長、黒沢さん、吉田さん、中村常務、宮内さん、顧文君先生……そしてたくさんの日本の図書館関係者、さらには街角で遭遇した善意でいっぱいの通行人のおかげで、東京、仙台、札幌、函館、旭川といったよく知りもせず関わりもなかった街が一生忘れ難い長い間恋しく思う街になりました。中国の有名ジャ

ーナリスト白岩松さんの言葉を拝借すると、「愛や恨みを脇に置いて理解するのが一番いい選択で、多くを知ることができ、すべてがありうる。」のです。今回の日本への旅を、日本を知る旅の始まりだと捉えようと思っています。東京工業大学であかね雲のように桜が咲き誇るころ、あるいは北海道大学の公孫樹並木が秋風に黄色くそまるころに、また日本を訪れようと思うのです。また日本を旅して見聞きしたことや感じたことのすばらしさをすべて家族や友人、同僚に伝え、もっと理性的に客観的に両国の関係を見ていこうと思っています。日本財団がより多くの慈善事業で世界中のより多くの人に知られ受け入れられますように。より多くの善の種をもっと遠くのもっと広い天地へまくことができますように。そして日本科学協会の図書寄贈事業が順調に運び、より多くの中国の大学図書館とその読者がこうした無私なる恩恵を享受できますように。

正道を貫き革新を　2015 年の中国大学図書館訪日活動に参加して

北京大学図書館　副館長　別立謙

6 月 28 日～7 月 5 日、日本科学協会のお招きで中国 30 の図書寄贈先大学図書館と輸出入機関から合計 35 名の代表が日本を訪れました。今回の訪問では日本の図書館および歴史文化施設などの視察を通じ日中間の学術交流が促進され、中国側の日本に対する理解が深まりました。交流と視察を通じて感じ取った日本の学者諸氏や国民の皆さんの精神は「正道を貫き革新」にまとめられます。我が国の大学教育と図書館の発展に対する啓発を得ることもできました。

一、公益事業を固く守り、交流活動を革新する「教育・科学研究図書の有効利用」事業の概要と意義

1924 年に設立された日本科学協会は公益性のある団体で、科学研究を奨励し、広く一般にその成果を伝達して、科学教育を促すこと、また図書の提供や学術交流等を行い、国際相互理解を促進することによって、文化の発展と人材の育成を通じて世界の安定的な発展に寄与することを目的としています。

1999 年から日本科学協会が始めた「教育・科学研究図書の有効利用」事業は、「図書の寄贈」と「人員の交流」という主な事業 2 つを通して国際交流活動を行い、理解と友好を強化しています。図書寄贈事業は日本の企業、大学、研究機関、出版社などの協力を得て収集した図書を主に中国の 52 大学へ寄贈してきました。これまでに中国の大学へ 340 万冊以上が贈られています。人員交流事業では 2001 年から 6 回に渡り中国の大学図書館責任者のべ 128 名が日本へ招かれています。

2004 年からは「笹川杯日本知識クイズ大会」も始まり、黒龍江省から次第に全国まで拡大して、今や参加大学は 371 校、選手は 1113 名という規模に達しています。中国の学生が日本語学習に対する学習意欲を増すだけでなく、入賞者の日本招待により日本への理解をさらに深めてもらうというイベントです。2014 年、同協会は『人民中国』雑誌社および中国駐日大使館と共同で日本の青年を対象とする「Panda 杯」作文コンクールを開催しました。実際に中国の社会、文化、歴史、中国の青年との交流を感じ、認識することを通じて、日中の相互理解と友情を促進するという目的のイベントです。

戦乱などさまざまな原因により各事業のイベントが衰弱していき、一時的にほぼ停滞した状態となったこともありますが、同協会はこうした偉大な公益事業を諦めることはありませんでした。1975 年には日本財団の支持のもと活動を再開しています。現任の大島美恵子会長および理事 7 名、評議員 6 名の有名な学者が共に努力し、協会の働きは日増しに発展して活動が豊富になり、貢献も大きくなってきました。こうした業績が達成されたのは公益性という理念と不可分であると思います。学者肌の会長と有名大学の教授や科学者

からなる理事および評議員が共に努力してきたこととも切り離せません。公益性という偉大なる理念を受け継ぎ、協会各位が忠誠、熱意、尊重、努力、執着により、日本と中国の間に文化と科学の架け橋を築いています。両国の科学技術研究者や関係者のつながりを強めて科学知識を普及させる取り組みは、世界平和の促進にも重要な働きをなしています。公益をしっかりと守って革新に努め、同協会はより大きな発展を得られることでしょう。

二、貴重な文献を保存して、空間サービスを革新－日本の研究型図書館を視察して得られたもの

今回の訪日では大学や研究機関の図書館を視察しました。明治大学和泉図書館、東洋文庫の図書館と博物館、東京工業大学附属図書館、公立はこだて未来大学とその図書館、北海道大学図書館です。近年に建てられた新しい館や空間サービスの面でモデルチェンジを経た館があり、中国のまさにモデルチェンジしている図書館にとっては重要な参考や手本とすべき価値のあるものです。

1. 基本的な情況

明治大学和泉図書館は面積 8800 平米、閲覧席 1000 席、蔵書約 40 万冊です。和泉キャンパス文系 1、2 年次の学部生と大学院の大学院教養デザイン研究科の院生を主な対象としており、人文社会科学について重点的に収集しています。2012 年 5 月に竣工し、設計理念は若い読者を念頭に置いたもので、動静でフロアが分けられています。内装や家具の色使いは上階に行くほど濃くなるグラデーションで、机も活発さのある丸形からきちんとした四角へと変化し、読者案内のサインプレートもフロアごとにデザインが異なっています。ビル全体を空中から見下ろすと平行四辺形のため、ビル内の設計には多くの変化があります。書架は斜めに配置され、側面にあるガイドが見やすくなっています。外壁のガラスにそって、広い閲覧スペースがあります。ガラス製パーティションで採光と開けた感じが増し、ピロティのスペースで密集書庫が展示されていました。同館は再建後に読者数が大幅に増えたため、蔵書の利用も増えているそうです。

東洋文庫の図書館と博物館は 2011 年築の建物にあり、いずれも無料でサービスを開放しています。図書館（The Oriental Library）は 1924 年に創立された日本最大のアジア研究図書館で、中国と中国の文化を研究対象としており、研究所の性質を兼ね備えています。当初に購入した Morrison 文庫を基礎とする蔵書は 100 万冊ほどで、中国語の書籍が 40%、西洋言語の書籍が 30%、日本語の書籍が 20%で、その他のアジア言語の書籍が 10%を占めています。たくさんの希少資料と善本が収蔵されており、『史記』など 5 つの国宝、7 件の重要文化財もあります。博物館では国宝『古文尚書』の巻子本が展示されており、日本の古い印刷物を時系列で展示する回廊がデザインされていました。足元は底の見えないガラス板で、計り知れない深さの光と影という雰囲気がありました。展示物は地図と油絵が多く、3 層の入り乱れている本棚の設計は特徴的で、知識の海をそぞろ歩くかのような感覚になりました。

東京工業大学附属図書館は 2011 年 4 月に竣工し開館されています。新館の外型は三角形で、4 階建てだった元の図書館は解体され、新館の主な機能空間は地下に作られているためキャンパスの緑が多めにとられています。図書館は地上 3 階地下 2 階で、エントランスから直接地下 1 階に入ります。蔵書は 65 万冊、閲覧席 721 席、面積 8600 平米です。地下室には三角形の天窓が設けられ、その下に三角形の机が配置されており、天窓の採光と呼応する効果を強調しています。内装は金属書架、壁面には打ちっ放しコンクリート（近年は流行していない技術ですが依然として巧みで完璧です）が採用され、電動の密集書架、専門的デザインの机と椅子、T 字型金属の外形を持つ照明スタンド（tech を暗示）などシンプルで実用的です。設計時にはキャンパスの樹木保護も考慮したとのことです。

公立はこだて未来大学（Future University-Hakodate）図書館については、大学の話からしたいと思いま

す。同大学は 2000 年に設立された全く新しい概念の大学で、情報学の単科大学です。人間と科学が調和した社会の形成を目指して設けられた同大学は優れた能力と人格を兼ね備えた人材を育てると同時に、知的・文化的・国際的な交流拠点として地域社会と連携し、学術・文化・産業の振興に貢献することを建学の理念としています。全学の合計で学生 1200 名、教員 70 名、職員 60 名です。本学にはシステム情報科学部の複雑系知能学科、情報アーキテクチャ学科があり、大学院はシステム情報科学研究科が設置されています。教育の目的は 2 つあり、1 つは社会で役立つ知識と能力を身につけさせること、もう 1 つは絶えず変化する環境に対応する能力を培うことです。新たな知識を身につける過程でさまざまな交流方式により学ぶ能力をつけさせています。キャンパス全体が 1 棟の大きい工場のようなガラス建築の中にあり、空間内に教室、研究討論室、実験室、機械室、講堂、図書館、展示ホール、博物館、体育館、自習室、加工作業場、スタジオ、モールが一体化しています。図書館の蔵書は多くなく、7.5 万冊ほどです。キャンパス全体で多くの学習共有空間が提供されているため、図書館の空間は主として閲覧と書庫に用いられ、キャンパスのうち図書館内だけは静かに維持するよう求められています。また、文献資料を利用して研究討論するニーズを満たすため、館内にも学術の研究討論空間が少し設けられています。図書館の資源は紙の本であれ電子版であれ、いずれも教員や学生のニーズに基づいて購入されています。

北海道大学（前身は 1876 年の札幌農業学院）附属図書館の蔵書は 388 万冊で、うち本館に 184 万冊があり、面積は 17676 平米です。最大の特徴は自動化された密集書庫です。書庫の面積は約 400 平米、高さは 6.7 メートルで樹脂製の本箱が 13000 個あり、本箱は 3 つの規格で各寸法の図書に用いられています。書庫全体で 32 万冊が収容でき、バーコード管理が採用されています。本館では DDC 分類法、その他の館では NDC 日本十進分類法が採用されています。閲覧室は動静により区画が分けられており、2 階はオープンな学習共有スペース、3 階は静かな学習スペース、4 階は研究スペースで、独立した閲覧卓が多く並べられています。同館では古籍のデジタル化を重視しているそうです。

2. 中国の大学図書館が手本にできるところ

視察してきた大学図書館の特長から、以下の点について中国の大学図書館が手本にできると思います。

1) 空間施設サービスは図書館の読者サービスの重要な側面として考慮され計画されており、至る所に「読者が中心」のサービス理念が体現されています。貸出機能はもはや図書館の主な任務ではありません。日本の大学図書館は読者ニーズの転向をよく考慮し、共有スペース、家具、施設、関連サービスを構築するのが主流です。図書館のスペースは基本的に動静で区画が分けられており、静かな学習とグループ討論という異なる読者ニーズを満たしています。新館の設計や旧館の改築に際して、図書館の学習機能、保存機能、討論機能が十分に考慮されています。館内の施設設備はすべて専門のデザイナーによる設計で、座席はエルゴノミクスが考慮されています。空間の節約、使用時の利便性、柔軟な組み合わせ、単独での学習など多様な機能には科学的合理性があります。和泉図書館ではさまざまなデザインの閲覧家具を備え、よく変わる造型により図書館の活発な空間の雰囲気が作りだされていました。読者のプライバシーや異なる読書ニーズを考慮し、大部分の閲覧席に独立した照明が配備されています。回廊には造型のそれぞれ異なる椅子があり、読者に休憩スペースを提供しています。特筆に値するのは同館ホールの座席デザインです。書き物のできるテーブル板が前列座席の後ろに設けられており、使いたいときは持ち上げてから平らにする作りです。収納時の静音、スロー降下機能もあり、非常に親切で緻密なデザインでした。その他の施設サービスの面では、図書館がノートパソコンの貸出をしており、読者は学生証をリーダーに通せば貸出を受けられる制度がありました。公共検索端末

を含め障碍者専用の通路や家具があり、専用の通話ブースも設けられています。

2) 図書館の建物は IT、環境保護、採光、静音、安全を細かく考慮して溶け込ませた設計理念で作られています。

a) 採光と視野：新築の図書館では一般的にガラスウォールが採用されており、建物の上端から伸びる庇がまぶしさをカットしつつ読書しやすい採光にも役立っています。書架は閲覧室の中心に配置され、ガラスウォールに沿って閲覧席が並んでおり、閲覧室全体の採光が良く、屋外を眺めるとキャンパスの緑などがいっぱいに広がっており、エコな図書館の一面を見せてくれます。

b) 省エネと環境保護：東工大図書館の外壁 2 面と三角形の屋根は太陽光パネルで、図書館の一部電源を供給しており、図書館の入口に太陽光発電で賄われている総電力とその日の発電量が表示されています。省エネで環境に優しい材料、施設の採用によりエネルギー効率が高まり、環境品質も向上しています。たとえばペアガラスを採用すると断熱効果が上がり、打ちっ放しコンクリート施工に木製の家具設備を組み合わせると環境に優しい感じになります。セントラルエアコンに省エネ型システムが採用され、床面の送風口により体感温度が改善します。

c) 間接照明：間接照明が採用され、照明は書架の天板に架設されていました。直接照明が採用されているのは閲覧席だけで、書架の位置を変更しても照明の位置がずれる問題は回避できます。家具の上部に架設された照明もあり、こうして天井に向けられた照明の反射効果で閲覧室の明るさが増していました。照明を天井に取り付けないのは地震が頻発するという要素を考慮してのことでもあります。

d) 館舎の設計と標識：館舎の建物は設計時に設計理念を十分に溶け込ませたものでした。和泉図書館では紙、木、森林のイメージが壁面、柱面、標識などのデザインに表れています。東工大図書館は三角形でチーズのような外形のため、Eat up your cheesecake！というキャッチコピーが使われています。チーズケーキ型の図書館で閲覧と学習をどうぞ（チーズケーキを召し上がれ）という意味です。どの館にも分かりやすいフロアマップと安全標識救急箱、緊急時の対応指針などが設けられ、とても周到に考慮が行き届いていました。ピロティと天窓のデザインも多く、広々とした感覚と採光の効果が向上していました。日本は地価が高く、日本人は空間を巧みに利用した設計に秀でているため、大学図書館の空間はたいへん「贅沢」に感じます。質のよい家具と環境設計にはいずれも明るさと活発さを見せる効果があります。標識のデザインはシンプルで、文字を図形に置き換えて説明しており、宣伝文句はかなり少なく、デジタルサイネージで情報をくり返し再生することにより紙の掲示使用を減らしています。和泉図書館の簡単な紹介、最新の公告、ノートパソコンの貸出状況、エリアマップなどはいずれも液晶ディスプレイなどで表示されており、読者はタッチパネル操作で欲しい情報を取得でき、エントランスではスロットマシーンに似たゲームで、図書館の利用法が紹介されています。頻繁な地震で書籍が落ちるのを防ぐため、書架の可動板は内向きに傾けて設計されています。読者が書籍や雑誌を調べやすいよう、図書館のエントランスには『日本十進分類法』が張ってありました。

e) IT 化：北海道大学図書館は人工知能の技術を採用して所蔵文献の科学的管理を実現しており、インテリジェント化したマジックハンドが自動的に本を取ります。各館の電動密集書架は照明が自動感応式で、読者が立ち入ると上にある照明スタンドが自動で点灯し、読者が自分で操作できるのでインテリジェント制御によるエネルギーと人手の節約ができます。東工大図書館の地下 2 階

ではインテリジェント型密集書架が採用されており、読者が書架外のコンピュータで必要な本をOPAC 検索すると、書架外のインジケーターが自動で点灯し、当該の本を見つけやすくなります。このシステムには 3 種類の挟み込み防止対策がされており、書架間のセンサーが書架底部、読者の脚に接触するとオレンジ色の鉄棒が感応し、他の人が書架外側から推そうとしたとき「！」マークが表示されます。

f) 細かいごみの分別：日本のごみの分別は欧米の先進国より進んでいます。見学した日本の大学図書館では、可燃物、不燃物、ペットボトル、キャップに分かれていました。ごみ箱は消防機材と合わせてキャビネット設計されており、清潔で手入れがしやすくなっていました。

3) 地下のスペースを十分に利用し、密集書庫により蔵書数を増やしています。東工大図書館は本体が地下部分で、地上はキャンパスの緑地に戻してあります。同館や和泉図書館などでは電動密集書架が採用されていました。図書館のサービスが従来の書籍と雑誌の貸出サービス中心から図書館の空間、設備と施設を利用した共同革新の学習と研究へと転向する傾向がこうした点にも現れています。図書館の主要な蔵書をすべて密集書庫で保管して、大部分の面積を読者に提供しているのです。

4) 多元化した空間の発展傾向：以上から、日本の大学は欧米の大学図書館の傾向を追って従来の閉鎖的な空間と管理から、討論や交流に開放可能で休む機能も兼ね備えた空間へと転換し、読者が適時、休憩や討論をできるようにしつつ、一部で従来の静かな学習エリアを残して静かに研究学習するニーズを満たしていることが分かります。各館とも以前の静かで飲食禁止というイメージを打ち破って、人の移動が多い場所にコーヒーショップを設け、読者のためにより心地良い環境を提供して、よりさまざまな需要を満たしています。

5) 稀少な文献の収集と保存が重視されています。東洋文庫の図書館はその収集の特色で有名です。同館は中国の甲骨 635 片、中国の家系図 860 枚、チベットとモンゴルの経典 1.3 万件、14 世紀末のコーランの複本 1 件を収蔵しています。主に関係する学者の研究用に設けられているため、閲覧室はすべてとても静かです。書庫への立入は厳格にされており、かつ稀少な文献をより良く保存するため、保護箱も使われています。書庫の入口の床は靴底の埃を吸着するゴムマットが敷いてあります。主旨が東アジア研究のサポートなので、資料の取得、目録編纂、保存はいずれも重要です。資料は専門家委員会の鑑定を経て、購入、交換、寄贈などのルートを通じて取得します。目録は中国語、西洋言語、アジア言語でオンライン目録システムに入力します。善本の全文映像、静止画、動画といった資源はいずれも持続的に加工してオンラインサービスの提供をしています。東洋文庫は学者に研究支援サービスを提供すると同時に、こうした所蔵品の保存を強調しています。東洋文庫にはこうした重要な国際的な秘宝を保存する責任があるためです。

三、災害後に再建される日本のコミュニティとそこに透けて見える民族の精神

日本科学協会の心ある手配により、東日本大震災（2011 年 3 月 11 日）からの再建中である普門寺とみんなの図書館（Everyone’s Library）を見学でき、内心とても震撼し感動しました。

普門寺は宮城県山元町に位置しており、海からの距離が 500 メートルしかないため、津波で本堂が全壊しました。普門寺は地域住民の心の拠り所であるため、住職の坂野文俊さんがもとの場所に一個人の力で再建を行いました。その心に感動した団体やボランティアからの支援も集まり、寺院とお墓の修復がついに完成したのだそうです。

みんなの図書館は地域の図書館事業で、地震などの自然災害でもとの住まいを離れざるを得なかった人た

ちを対象にしています。地域社会の再建が必要な地区と過疎状態が深刻化し続けている地区で、小規模な臨時図書館サービスを提供するというものです。みんなの図書館事業は日本財団からの資金援助を受けています。みんなの図書館は被災地に合計十数箇所あり、これまでに全国各地から約 50 万冊の本が寄贈されました。

私たちが見学したのは普門寺の近くにあるみんなの図書館です（http://www.mintosho.org/library）。同館は簡易ハウスに適当な家具が置いてあるだけのもので、主に子供向けの書籍があります。館長の紹介によると、同館の開いている時間は朝 8 時から夕方 5 時で、開館当時は当番に当たる従業員がおらず、全部で 15 人の兼職する従業員が順番に担当し、本を借りる人が自分で貸出登録の手続きをすることになっていましたが、本はほとんどなくなっていないそうです。同館の開館当時は 3300 冊だった図書が現在は 8000 冊になっていますがすべて寄贈されたもので、これまでに 4500 回以上の貸出を行っています。禁煙であることを除けば自由な図書館です。この地区には 300 世帯が暮らしていましたが、今は 3 分の 1 しか残っていません。この図書館は子供達の心の庭で、津波で家が壊され苦しむ子供達が、読書を通じて心を解放し、傷ついた心を癒やせる場所なのです。図書館の外には簡易建築の臨時集会所があり、残った地域住民達が津波で亡くなった身内のために祈っています。

バスの乗車場所では災害後再建の写真館も見ました。館内の写真と文章は被災の情況と再建の情況が記録されたものでした。写真館の外はきれいに飾られ、生花でいっぱいでした。

こうした小さな施設、機能と細かなあれこれに感じたのは、災害を受けてもちろん気持ちは沈むものの、再建は新しい生活の始まりであり、未来を向いて楽観的になろうということです。日本人は圧力に耐え自然に抗うことができ、忍耐強く頑張りぬく精神があって、また考えがきめ細かく、至る所に思いやりが行き届いており、暮らしの中に笑顔があります。

普門寺とみんなの図書館は当地で家を再建する住民が気持ちを建て直すための殿堂です。見学させてくれた図書館の皆さんは図書館の存在価値を証明してくれました。図書館関係者のひとりとして仕事の重みを深く感じました。被災地の人々は不撓不屈の郷里を再建する精神をひしひしと感じさせてくれました。同行者からは中国から持ち込んだ図書、図書館のノベルティが贈られ、また現場での募金も行われました。あまりの感動に少しでも貢献をという気持ちです。この瞬間には決して民俗の恨みなどありませんでした。そこにあったのは人間性の交流、感動、関心と助け合いだけです。

四、日中大学図書館フォーラムでの収穫

6 月 30 日の午後、「大学図書館の変革と発展」をテーマとする日中大学図書館フォーラムが東京工業大学で行われました。このフォーラムは日中共催で、日本科学協会、東京工業大学附属図書館が主催しました。

千葉大学の副学長兼図書館館長の竹内比呂也教授と上海交通大学図書館館長の陳進教授が基調講演を行い、千葉大学の図書館を例に未来の大学図書館の教育学習支援機能を中心とするテーマ内容と、未来思考および上海交通大学図書館の革新のモデルチェンジ事例の紹介がありました。他には筑波大学図書情報メディア系の呑海沙織准教授による学習共有空間の機能および学生支援の面における探索について、東京工業大学附属図書館の高橋栄一館長による研究型大学の電子ジャーナルの危機、購入の傾向と考えについての講演がありました。大連理工大学図書館館長の楊海天教授は大連地区の大学での日本科学協会寄贈図書の受け入れ情況を振り返り、図書寄贈事業に対して建設的な意見を述べました。北京大学図書館の別立謙副館長からは、北京大学図書館の世界一流に向けた 2014-2018 行動計画の概要について概要の紹介がありました。講演の後、出席者の間で熱い討論が展開されました。議題は情報共有の空間、空間のモデルチェンジ、IT ユビキタス

教室、情報リテラシーの教育、電子資源のグループ購入などの面に集中しています。

短い準備期間ながら各位の努力によりこのフォーラムは最終的に成功を収めました。フォーラムでの交流と討論を通じて、中日双方の大学図書館がお互いに対する認識と理解を増しただけでなく、同時に大学図書館の未来の傾向とモデルチェンジについて各自の発展する方向が明確にできました。

シンポジウムの交流の前に、中国の大学で文献資源を共同で確立し共有している情況を紹介するよう団長から話がありました。日本の大学はこの点では保守的なため、北京大学図書館が牽引する中国高等教育文献保障システム（CASHL）と中国高等教育機関人文社会科学文献センター（CASHL）の 2 事業について基本的な情況を紹介しました。しかし、東京工業大学図書館の高橋館長による研究型大学の電子ジャーナルの情況の紹介と考えによると、日本の大学でも 2011 年 4 月に JUSTICE（Japan Alliance of University Library Consortia for E-Resources の略称）という連盟を設立し、各加盟館が電子ジャーナルの購入について JUSTICE を通して出版社と公称し、各館の取り寄せる内容は自らの財政状況と必要性によって決めているとのことです。この連盟は中国の大学図書館デジタル資源購入連盟（DRAA）とよく似ています。他の面での資源の共有が日本の大学図書館であまり展開されていないのは、日本の学術関係者が版権の保護を非常に重視していることと関わりがあります。ゆっくりとではありますが、その歩みは安定しており確実なものです。

今回の訪日で感じたこと、収穫できたことは非常にたくさんありました。このレポートは内容が多くなっています。時間の関係で深い交流ができなかった図書館もありますが、足を運んで見学することができ、日本の大学図書館の現状と発展傾向を知ることができたのは大きな収穫です。全体的な感想はやはり「正道を貫き革新」にまとめられます。この言葉は北京大学の新しく就任した林建華学長が就任後初めて全学の中間層幹部を集めて開いた会議での報告のテーマです。日本科学協会の事業も、日本の各大学および図書館の発展も、そして被災地の再建も、このテーマが貫かれている印象でした。日本はまさに日本人の落ち着いていて、入念で、苦しみに耐え、よく頭を使い、誠実で、親切で、楽観的な精神の力で急速に発展し、かつ多くの面で欧米諸国に追いつき追い越してきました。中国で改革開放の足並みが速まり、さまざまな建設が加速される中、多くの手抜き工事、大げさで上調子な表象が見られますが、いずれも真剣に考え直し考慮しなければならないことです。中国もまず落ち着いて一歩ずつ着実に目の前のことをこなし、品質の要諦をつかんで、体系的に未来の発展を考慮してこそ、より遠くより高く未来へ進んでいけるのではないでしょうか。

「中国大学図書館担当者訪日交流 2015」に参加の感想

天津外国語大学図書館　副館長　張秀華

2014 年、日本科学協会と本学の努力により、本学図書館が日本科学協会寄贈図書の受け入れ先のひとつとなりました。そこで私は今年 6 月 28 日～7 月 5 日、日本科学協会のお招きにあずかり「2015 年中国大学図書館責任者訪日」に参加できたのです。

今回の訪日のハイライトの一つは、日本科学協会と東京工業大学附属図書館が共同で主催した「日中大学図書館フォーラム」です。フォーラムでは出席した代表が忌憚なく発言し、中日図書館の友好な交流が促進され、また双方の相互理解も増進されました。そのほか国立国会図書館、東洋文庫、明治大学図書館、公立はこだて未来大学図書館、北海道大学図書館、被災地の「みんなの図書館」といったさまざまな代表的図書館を見学し、スタッフと友好交流を行いました。

心を込めてこうした図書館を選定してくださった主催者に対しこの場で改めて感謝を申し上げます。どの館の特徴も忘れがたいものでした。このうち、東洋文庫は日本最大（世界第5位）のアジア研究図書館で、日本の三大漢学研究要衝の一つでもあり、中国と中国文化を主要な研究対象とする専門の図書館兼研究所です。1948年から国立国会図書館の分館となっている点に、中国文化の研究と中日交流に対する日本の重視ぶりが覗えます。また公立はこだて未来大学図書館は「森にいる者は森を見ず」と言えるところで、建物の造型、経営理念、学術の雰囲気に関わらず、すべてに自由、革新、発展する深い意味が体現されており、「道に形無く却って型有り」を強く感じられる、希望に満ちた真の未来の大学でした。周知のように、日本は地震、津波などの自然災害の多発国で、天は非情ですが人には情があり、「みんなの図書館」のような被災地の臨時図書館は、被災地住民にとって大きな精神的励みとなります。みんなが手に手を取って気持ちを通い合わせ、一致団結すれば困難を克服でき、人の意志は天より強いのです。私の知る限り北海道は日本では決して経済の発達している地域ではありませんが、北海道大学図書館の機械化書庫、無人貸出返却システムなどには感慨無量で、日本図書館のハードウエア設備の先進性に感服しただけでなく、日本の教育事業に対する投入の多さも学ぶべきところがあると思います。

思うことを書き尽くすわけにはいきませんが、最後に本学と図書館を代表して日本科学協会各位に改めてお礼を申し上げます。今回の充実した緊張感のある有意義なイベントを主催して中日の図書館の学術交流と相互理解を促進してくださったことは、今後さらに協力を進めるための良好な基礎となるでしょう。

清華大学図書館　資源建設部主任　呉冬曼

「中国大学図書館責任者訪日交流」活動レポート

日本科学協会の招待に応じて、2015年6月28日～7月5日、「中国大学図書館担当者訪日団」の一行に参加しました。日本を訪れたのは今回が初めてです。日本科学協会の交流活動に参加するのも初めてでした。日本科学協会に念入りに手配していただいた7泊8日のスケジュールは内容が盛りだくさんでした。時間が短く交流も見学も浅くなってしまいましたが、百聞は一見にしかずで、見聞きした何もかもが深く印象に残っています。収穫も感じたこともたくさんありました。30館を超える大学図書館の館長達と同行する機会でもあり楽しく過ごせました。旧交を温め新たな友人とも知り合い、忘れられない思い出がたくさんできました。

東京工業大学図書館の催す「日中大学図書館フォーラム」が活動のハイライトです。上海交通大学図書館の陳進団長や日本科学協会の顧先生らの努力もあり、短時間での準備ながらフォーラムは順調に行われました。日中いずれの報告も代表性があるものでした。日本側からは電子資源の構築、図書館の構造改革と空間構成、図書館情報教育といったテーマで報告がありましたが、いずれも大学図書館業界として関心の高い話題で、日本の大学図書館の現状、業務の理念、目下の課題を知ることができました。言葉の壁と時間の制約もあり、あまり深い交流はできませんでしたが、収穫は大きかったと思います。今後も機会があれば日本の同業での研究成果や発展情勢により関心を向けていくつもりです。中国側からの報告3件もすばらしいものでした。名声ある陳進館長の講演を中国国内でも聴講する機会がなかったため、願いが叶ってうれしく思います。

今回の活動には東洋文庫と東京工業大学、明治大学、はこだて未来大学、北海道大学などの図書館の視察もありました。どの館も代表性のあるもので、足を踏み入れるたび矢も盾もたまらず興味が湧きました。同

業者はやり方を見ると言いますが、ご多分に漏れず私たちも注意して観察し、可能な場では業務の資料として写真を撮らせてもらいました。印象として日本の図書館はインフラが一流、理念が先進的で、空間の配置は読者の需要に寄り添っており、サービス面では細部の至る所で人間味と気遣いが現れていて、精密さを感じました。感心してやみません。日本科学協会のおかげで伝統とモダンの共存する北海道大学図書館を見学することもできました。同大学の地下密集書庫は設備が優れて効率が良く、また現代的な教育理念“Open Space Open Mind”に基づいて作られたはこだて未来大学とその図書館も見学できました。全く新しい空間の配置、全く新しい教育と学習の方法、完全に開放された空間で、質問したいことは多かったものの、日本側と交流する中ですべて教えてもらうことはできませんでしたが、得られた情報は凝り固まった頭に風穴を開けられるほどのもので、とても考えさせられました。図書館業界で注目が集まっている話題と言えばモデルチェンジです。インターネット環境のもとで高等教育は、大学図書館はどこへ向かうのでしょうか。はこだて未来大学は勇気ある試行を行い、全く新しいモデルを見せてくれました。同大学の発展には引き続き関心を寄せ、そこから学んでいきたいと思います。

7 月 1 日には 2011 年の東日本大震災で深刻な被害を受けた山元町を視察しました。普門寺の住職から被災地の復旧と臨時図書館であるみんなの図書館の建設の経緯を伺いました。田野がひっそりと静まり返る景色は美しく、当地の家屋や道路にはほとんど災難の痕跡が見えませんでした。ツアーバスの車内で放映された記録映像での普門寺アルバムでは痛ましい被災の様子が見られました。壊れた家屋は修理できても、身内を亡くし家庭が崩壊した傷はいつ癒えるのでしょうか。普門寺の住職が語られる落ち着いた表情からは強さが透けて見えました。郷里のお年寄り達に対するその大いなる愛には尊敬の念を覚え、感動しました。当地の見学は地に足が付いたもので、敬愛なる普門寺の住職、優しく素朴なみんなの図書館の責任者さん、汶川大地震の折に支援してくださった村長さんは、言葉が通じなかったにも関わらず、皆さんのお話はすべて分かったように感じられました。彼らの体現している剛毅で勇敢な日本民族の精神には非常に尊敬させられます。

今回の視察団はスケジュールが詰まっていて移動時間が長く大変なものでもありました。ですが長距離バスで北日本の美しい風景を心ゆくまで見ることができたことは満足で、富良野の花の海はうっとりする美しさでした。日本科学協会の歓送迎会、東京工業大学での懇談会では、日本財団の幹部、図書館の同業、日本に滞在中の学者、留学生の皆さんと思いきり心おきなく話すことができ、ツアーバスでののど自慢大会では所感交換会がより生き生きしたものに感じました。また、折を見ては繰り返し復習して視察団の同行者全員の名前をしっかり覚えました。共に旅した 8 日間で豊富な見聞が得られたとともに、同業の皆さんとの深い友情を得ることもできました。

顧先生は今回の活動の世話役で、それまで電話とメールのやりとりしかありませんでしたが、今回ご本人とお会いできうれしく思っています。微信のグループで彼女を褒め称えたこともあります。入念で周到な効率も良い仕事ぶりと超人的なコミュニケーション能力で日中友好の橋を架けてくれた彼女は、これほどの大所帯の旅程のすべてをきちんと世話してくれました。何事も団員への配慮が行き届いており、顧先生や吉田さんたちはかなり苦労されたかと思います。この場をお借りして鄭重に感謝と敬意を伝えさせてください。

清華大学図書館は日本科学協会から最初に寄贈図書を頂いた図書館のひとつです。この十数年で責任者は何度も替わりましたが、業務は安定して進んでいます。日本科学協会の寄贈図書は図書館の日本語文献の不足を大いに補ってくれています。私には現任の責任者として引き続き業務を計画し、本学の読者の需要をより確実に把握して寄贈図書が清華大学の教育および研究によりよく活用できるように努めていきます。

日本科学協会の図書館担当者訪日交流に参加して

蘭州大学図書館　副館長　宋戈

2015 年 6 月 29 日～7 月 4 日、中国 32 大学の図書館責任者 35 名からなる中国大学図書館館長代表団に参加し、日本科学協会の招きに応じて日本を訪問しました。訪日中、代表団の一行は明治大学、東京工業大学、東洋文庫、はこだて未来大学、北海道大学など日本の大学図書館を視察し、東日本大震災の被災地である山元町の普門寺と「みんなの図書館」を訪れ、日本科学協会と東京工業大学附属図書館の共催による「日中大学図書館フォーラム」に参加しました。

日本については、若いころ見た日本の文学作品と映画である程度は理解しています。行く前に知っていた日本は世界第二位の経済大国で、自動車製造業が発達し、電気製品の作りが良く、桜、和服、富士山があるというぐらいでした。わずか 7 日の慌ただしい旅でしたが、豊かな日本を深く経験して、日本が強大になった原因を理解できました。

一、私の見た日本と日本人

1、環境が優美で、環境保護意識が高いようです。宇宙から日本の国土を見下ろすと、大きなエメラルド色の布に覆われたように見えます。国連の発表した 2003 年の 1 人当たり緑化面積では、日本は 90%以上に達しており世界の首位です。行ったところは、都市の中にも大きな林や公園の芝生があり、農村では家の前後に木が青々と茂っていて、耕地は織物のようでした。日本では人々が自分から環境保護意識と良好な衛生の習慣を身につけており、平凡さの中に偉大さが見え、かなり人々の生活態度を変えたと言えます。たとえばごみ処理では細かく煩雑な分類収集の過程をほとんどの日本人が受け入れています。通り、駅、ホテル、レストラン、どこも清潔できちんとしていて、不用品、痰の跡、吸い殻などのごみがまったく存在していません。どこへ行っても立ち去るときはごみを自分の袋に入れて持ち帰っています。広い屋外公園でも喫煙者が集まってたばこを吸う場所が用意されています。

2、公共の施設が人に優しく、行き届いた細かいサービスでした。今回の旅行はちょうど梅雨時だったのですが、ホテルにもツアーバスにも備え付けの傘があり、入口には傘袋がありました。無料の公衆トイレはどこでも見られて、多いだけでなく目立つ表示があり、内部設備もそろっていて、暖房便座や自動洗浄便器が設けられていました。トイレットペーパー、ハンドソープ、ハンドドライヤーなどがすべてそろっていて、トイレットペーパーはすべて超薄型の再生紙で使用後そのまま流せるものでした。高齢者向けや障碍者向けのトイレには警報装置もついていました。公園はすべて水飲み器が設置されていて、直接飲むことができます。道路は広くないものの、合理的で人に優しい設計でした。人口の密集している都心部には自動昇降の立体駐車場ビルがあり、日本では土地資源が大切にされていることと土地の利用率の高さを実感しました。

3、礼儀と秩序を重んじ、紀律に従って時間を守っています。訪問した各大学、空港、街頭、駅、店、レストランなどどこでも、出会った日本の人々は服装も持ち物もきちんとしていて、上品で礼儀正しく、日本人の謙虚さと礼儀正さはすでにプロの境地に達していると感じました。日本では歩行者が交通規則にとても注意しており、道路上で警官を余り見かけませんでした。車が来ているかに関わらず、赤信号を見ればすぐ足を止め、クラクションが聞こえてこず、歩行者に出会っても足を止めていました。東京の街はとても狭いながら、管理に秩序があり人々も従うため、車は速く走ることができ、渋滞をほとんど見かけませんでした。歩行者はすべて沿道の左を歩き、気の向くままに通行するのはマナー違反です。予定どおり訪れた図書館では入口に担当者が待機しており、関連資料、会場、飲み物、施設などすべて手配が整っており、穏やかな雰

囲気の中から日本の同業諸氏の職業精神の精髄を感じることができました。

4、厳密、勤勉で仕事熱心です。訪日の計画で日本科学協会が提供してくれたスケジュールはとても細かく分刻みの精度でした。どこかに着くたび、日本側の全行程で中国大学図書館代表団の 35 人を担当する顧文君さん、吉田さん、宮内さんの 3 人とガイド 2 人が当日の活動とスケジュールを説明し直しては実施してくれました。食事、会議、資料、乗車、荷物、ショッピング、宿泊などのすべての細部まで含まれており、入念で非常に細かいその仕事に感動しました。それぞれの資料や活動の手配から、日本の皆さんが事前に大量の準備作業をしていたことが感じ取れ、彼らの職業精神には感嘆させられました。ガイドの話によると、日本では仕事の競争によるストレスが非常に大きく、普通の会社員は遅くまで働いてから食事やレジャーに行くので、日本の多くの都市で夜サービス業が賑わっている理由のひとつともなっているそうです。

5、治に居て乱を忘れない、学ぶことに優れた民族です。日本では、至る所に中国式や洋式の建物が見られ、しかも両者がとても調和して結び付いていました。これは日本ならではの景観です。日本民族は他人から学ぶことに優れた民族で、学ぶ時はその形だけではなく、さらにその精神にまで注意を払います。そして意識的にそれを広げ、最終的には自民族の文化に溶け込ませてしまうのです。日本人が先進的な物事を受け入れるのがとても早いのは、資源に乏しく狭い国土による危機感によるものです。おかげで彼らは自分たちが一番いいと思うものを取り込んで自らを充実させ続けて来られたのです。唐代には日本の遣唐使が何度も大量に中国へ渡り、学んだことにより「大化の改新」を促して日本の封建制度が始まりました。明治維新に至ると、日本は全面的に西洋に学び、工業と軍事を発展させています。こうした世界への眼差しと学ぶ態度があってこそ、日本は近代になってからの発展が早く世界の大国になれたのです。

6、教育を重視して、人材を育成しています。日本では 9 年間の義務教育が実施されており、小学校、中学校教育率は 100%です。大学全体の入学率は 40.3%、大学教育を受けた人数が総人口に占める比率は 48%にも達し、識字率は 100%近くあります。日本の教育は素質を重視しており、教育課程は学科、道徳、特別活動（学年・クラス活動、学生会活動、班行動、学校の集会を含む）の 3 つから構成されています。日本の教育は若い世代の社会適応能力を育成することが目的で、教育は社会の需要を満足させなければならないと強調されています。このため、教育の重点は以前のような知識伝授から能力の育成に移ってきました。日本は教育資源が豊富で、現在の国公私立大学は総計 800 近くあり、日本の少子化による労働力の欠乏が背景にあるため、日本は大量の人材を切実に必要としています。明治大学と北海道大学を訪問して思いがけず知ったことは、日本の各大学で大学院にいる中国の留学生の割合が外国籍の学生の 50%に達していることです。

7、とても強い防災意識。日本は災害が多く、地震、火山の噴火、台風、津波、洪水などが常に人々の生命と財産の安全を脅しています。災害と戦ってきた歴史の中で、日本人の防災に対する意識と能力は絶えず強化されています。日本の旅館、図書館、商業施設などの建築物の中では、至る所に非常口などのマークを見かけますが、聞くところによると、日本は小学校から大学や職場まで、工場から農村まで例外なくそれぞれの機関で日常的に防災の広報と訓練を行っているそうです。

二、日本の大学図書館と民間図書館での見聞

日本の大学は国立大学、公立大学、私立大学の 3 種類に分けられます。通常、国立大学は歴史が長く、国が投資して設立・運営しているため、学費が低めです。公立大学は地方自治体が投資して管理しています。私立大学は数が最も多く、民間の資本、財団の投資、ファンドなどが資金源です。今回の訪問した 4 大学のうち東京工業大学、北海道大学、はこだて未来大学は国公立大学で、明治大学は私立大学です。大学の図書館以外、東洋文庫とみんなの図書館も訪問しました。

1、明治大学和泉図書館

明治大学には 4 つの図書館があり、中央図書館、和泉図書館、生田図書館、中野図書館の 4 館は蔵書の内容とサービス機能の面で少し違いがあります。明治大学図書館館の蔵書は 240 万冊です。時間の関係で、私達は和泉図書館だけ見学しました。2012 年 5 月に開館した和泉図書館は和泉キャンパスのシンボル的な建物で、主な蔵書は人文社会科学関連です。貸出は自動化、インテリジェント化が実現されており、豊富なデジタル資源を購入しています。読者に一見して図書館の蔵書の豊富さを経験させるため、館内の本棚は従来の規則どおりでなく、一定の角度にレイアウトされています。面積こそ大きくはありませんが、高度に個別化された人間的な学習共有スペースが多数あります。たとえば小型の研究討論室、個人学習室は、テーブルと椅子のデザインも色もモダンでアーティスティックなものばかりで、活力に富んでおり、自由に組み合わせて使うこともできるので、若い学生の学習、交流、息抜きの需要に合致しています。1 階から 4 階の家具は学習の強度により浅くから深くなるよう考慮されています。図書館の隅には 1 人しか入れない三角形の透明な防音ガラスの部屋が設けてあり、学生が電話するときに使えます。以上のさまざまな事柄に、空間の利用と人間工学に基づく管理についての図書館の建物の設計者の独創的な工夫と精密な考えが表れています。見学中は心静かに学ぶ学生、小型の研究討論室で激しく討論する教員と学生達、さらに回廊の柔らかい椅子上に横たわって眠る学生、携帯電話で遊ぶ学生を見かけました。和泉図書館の建物の理念と設計から、求める建設の発展方向を感じることができます。オープンで調和の取れた、人に優しい学習共有スペースです。

2、東京工業大学図書館

東京工業大学は本部が東京都目黒区にあり、工学と自然科学研究を主とする日本トップ、世界でも一流の理工科大学で、前身は 1881 年に設立された東京職工学校です。120 年の輝かしい歴史とともに、東工大は未来の先端の科学技術をリードする国際級の理工系大学に向かって邁進しています。研究型の大学として、東京工業大学は学術研究、科学研究の成果、教育など多くの面で日本のみならず世界でも高い名声を有しています。

東工大新図書館は 2012 年に供用開始され、大学本館から正門への軸線と鉄道に平行な軸線の交点に位置しています。図書館の主要な機能は地下 2 階の空間に置かれ、地上部は大型の広場と「緑の丘」で、力学的な美しさに優れた三角形の建物「学習棟」が V 字形の構造で空中に浮かび、立体的でモダンな視覚的インパクトを与えます。同館の発展目標は、効果的に学習型図書館と保存型図書館の機能を発揮して、先進的なデジタル図書館を建設し、教員と学生の教育や研究にすばやく活用できる豊富な文献情報と資源の保障を提供することです。地下 1 階は開架(書架は低め、重要度の高い図書)、自習エリア、電動密集書架（重要度のやや低い図書）が一体となった学習スペースで、地下 2 階には開架(書架は高め、重要度の高い図書)、最新刊閲覧エリア、自習エリア、密集書架（重要度のやや低い図書）と教員や名誉教授のために設けられた研究室があります。地上階 2、3 階は自然採光のきわめて良い、教員と学生のための学習スペースです。図書館の蔵書は総計 65 万冊で、本学の読者が 1 万人近く、社会に向けた開放サービスもしています。同館は近年、文献資源の構築を電子文献主体にしてきましたが、日本国内の不景気により国立大学図書館の経費がここ 10 年の中で年々下がる傾向のため、また 2013 年からの円安の影響もあり、一部大型出版社のデータベース定期購入を停止せざるを得なくなっています。そのため、日本の大学図書館は 2011 年に大学図書館コンソーシアム連合（Japan Alliance of University Library Consortia for E-Resources : JUSTICE）を設立しました。中国の大学図書館デジタル資源購入連盟（DRAA）と似た組織で、参加各館はこの連盟を通じてデータベース業者、出版社と価格交渉を行っています。

3、北海道大学図書館

建築面積 1.7 万平米、蔵書は 388 万冊で、毎年デジタル資源の購入に投じる経費は 6 億円です。年間のべ利用者数は 57 万人、開館時間は平日 8：00～22:00 で、週末 9：00～19：00 で、試験期間中はある程度延長しています。正職員はやや少なく、毎年の採用試験では筆記試験と面接を行っており、英語のレベルを重視しています。古籍 32 万冊、すでにデジタル化を実現しており、図書目録の作成、貸出などの基礎業務はアウトソーシングで、分類法は NDC 日本 10 進分類法を採用しています。RFID と全自動書庫管理システムを実現しており、このシステムは世界一流レベルの規模で、完全インテリジェント化していますが、保守運用コストは高価です。はっきりと見やすい館内表示ガイドシステムと警告札はスタッフ自身がデザインしています。同館は試験期間を除き学外の読者にも開放されています。

4、はこだて未来大学図書館

はこだて未来大学は 2001 年に設立された公立大学です。本学にはシステム情報科学部の複雑系知能学科、情報アーキテクチャ学科があり、大学院はシステム情報科学研究科が設置されています。コンピュータと通信技術の急速な進歩に従って、国際情勢は瞬時に千変万化します。同大学はグローバル化の世界で生存し続けるため、2 つの面で努力しています。ひとつは教育で、情報技術を中心として分析、技術、表現などの能力を兼ね備える人材を育成します。もうひとつは研究で、人材を育成するため、世界水準に達する高い水準の研究活動を行っています。

はこだて未来大学のオープンな最前線の大学という建学の理念と考え合わせれば、教育、科学研究、図書館、スタジアム、実験室を高度に集積し一体化した、そして高度に開放的な総合性のある 4 階建て単体の教育棟を理解するのは容易です。建物は情報研究図書館と個性的な学習スペースに分けられます。建物は大量のガラス仕切りとオープン型設計を採用しているため、高い場所に立つと機能ごとのパーティションで教員と学生達が読書、研究討論、実験、鍛錬などをしている様子をはっきりと見ることができますが、防音効果が優れているため互いへの影響はありません。すべての室内設備はとてもモダン、柔軟性、人間味がある設計で、とりわけ個人の学習とグループでの研究討論に使える学習共有スペースが重視されています。一部の区画には学習用品のほか冷蔵庫、扇風機、生活用品などもありました。同館スタッフの説明によると、大学では通学生だけを受け入れ、宿泊を手配していないため、一部の学生は帰宅しなくとも 24 時間この場で過ごし、学習や休憩ができるようにしてあるとのことです。図書館の正職員は 4 人だけで、全館のすべての資源の購入と全学 1000 数人の読者のサービス業務を担当しています。

5、東洋文庫

東洋文庫は日本最大(世界第 5 位)のアジア研究図書館で、日本三大漢学研究要衝のひとつでもあり、東京都の文京区に位置しています。専門的に中国と中国の文化を主要な研究対象とする図書館兼研究所で、1948 年から国立国会図書館の分館となっています。創立は 1924 年で、1917 年に岩崎久弥が購入したモリソン(George Ernest Morrison;1862-1920)を基に、岩崎文庫、藤田(豊八)文庫、小田切(万寿之助)文庫、河口(慧海)文庫などが続々と増えました。1948 年から国立国会図書館の分館となっています。東洋文庫が収集している東方研究関連の各国の書籍はとても全面的で、その中には敦煌文書の縮写フィルムと写真も含まれます。東洋文庫には研究部もあります。兼職あるいは専任の東洋文庫研究員を擁しており、研究部には敦煌文献、チベット、中央アジア、イスラムなどの研究班が設けられています。蔵書は 80 万冊に達しており、中国、日本、朝鮮、モンゴル、シベリア、中央アジア、西アジア、エジプト、インド、東南アジアといった国や地域の書籍の資料が含まれています。所蔵している中国の稀覯本は、中国の地方誌と叢書約 4000 部、

中国の方言辞典 500 数冊、中国の家系図、清版満州・モンゴル文字の書籍、各種バージョンのマルコ・ポーロ『東方見聞録』、中国探険隊の報告書、中国の考古学資料、『順天時報』、『華北正報』、各種バージョンの大蔵経、その他のチベットの文献 3100 点などがあります。東洋文庫は日本の学術界でアジア文献の宝庫と称えられていますが、実際は専門的に中国と中国の文化を主要な研究対象とする図書館兼研究所です。

６、普門寺と「みんなの図書館」

7 月 1 日、代表団の一行は宮城県南部の亘理郡山元町にある普門寺と民間図書館「みんなの図書館」を訪ねました。普門寺では、2011 年 3 月 11 日に日本史上最大マグニチュード 9.0 の大地震と津波が発生したときの現地の様子を住職に話していただきました。山元町は被災が最もひどい地区の一つのため、普門寺の所在地は震度 7.0 以上の大地震と 8 メートルに達する津波に遭遇して壊滅的な状態となり、死傷者が多く、家屋や財産も壊し尽くされました。このような状況で、現地の人々は忍耐強く頑張りぬく気力とボランティアの助けにより再建を展開して、2 年内が基本的な生産と生活を回復しました。訪ねた先は視界いっぱいに緑の耕地と修繕してすっかり新しくなった農家が広がっており、普門寺も地域住民が完全に自主再建したもので、住職の紹介もなく、写真と普門寺の辺りに増えている多くの新しい墓を見なかったとしたら、あの災害が深刻な記憶とこの活気に溢れる現実を結びつけることは難しかったでしょう。

「みんなの図書館」の館長のお話によると、再建を必要とする地区と人口の過疎化が激化し続けている地区では、災害で身内と郷里を失った人、災害の恐れる子供や成人の長期的に不安定な心理状態を治療し慰めるために、元の居住地から異郷に転出した人々が故郷に戻ったときの居留地とするために、各種の学習会を催して住民に手工芸などの技能習得を助けるために、人々がお金を使わず行きやすいように……、かくかくしかじかの様々な需要に促され「みんなのとしょかん」が被災地で建設されたそうです。「みんなの図書館」は被災地に 10 数か所あり、現在すでに日本全国から約 50 万冊の書籍が寄付されています。簡易な施設で作った小さい「みんなとしょかん」では、多からぬ書籍、優しさのある施設から、強い愛と人々のすばらしい生活を築くあこがれが感じられました。代表団は「みんなのとしょかん」に中国から持ってきた連環画を数セット寄贈しました。

三、「日中大学図書館フォーラム」への参加

6 月 30 日午後、中国代表団の一行と日本の大学図書館の代表合計 50 数人が東京工業大学図書館の催す「日中大学図書館フォーラム」に参加しました。日本科学協会の大島美恵子会長も参加し、東京工業大学の丸山俊夫理事から開幕の挨拶がありました。

千葉大学図書館の竹内比呂也館長、上海交通大学図書館の陳進館長が「大学図書館の今後の発展－教育・支援の学習機能を中心に」、「未来思考の革新のモデルチェンジ」の基調講演を行いました。2 人の館長はそれぞれ自国の大学図書館の具体的な情況と合わせ、大学図書館の建物の施設、資源サービス、情報研究、ユーザーレイティング、調和した管理、未来の発展などについて論述を行いました。

東京工業大学附属図書館の高橋栄一館長、筑波大学図書情報メディア系の呑海沙織准教授、北京大学図書館の別立謙副館長、大連理工大学図書館の楊海天館長らが、それぞれ「研究型大学の電子ジャーナル」、「図書館情報学専門教育の発展」、「北京大学図書館の世界一流に向けた 2014-2018 行動計画の概要」、「大連地区高等教育機関の日本科学技術協会寄贈図書の情況の総括および提案」をテーマとする講演を行いました。

中日双方の代表が現在の新しい情報環境の下で大学図書館の直面している施設や資源の構築、サービスのモデルチェンジ、人材育成、理念の革新といった多くの面について熱烈な討論を展開しました。交流を通じ

て、文献資源の購入経費が足りない、新しい情報の環境のもとでのサービスのモデルチェンジは、中日の双方が共に直面しておりしかも重点的に解決しなければならない難題であることが分かりました。同時に、日本の同業諸氏の効率よい管理、勤勉さと熱心さ、細かなサービスと先進的な理念など学ぶに値する面をたくさん目にすることができました。

四、日本科学協会への訪問

6 月 30 日、代表団は図書寄贈事業の提唱者である日本財団の笹川陽平会長と推進者である日本科学協会の大島美恵子会長を都内で表敬訪問しました。団長を務める上海交通大学図書館の陳進館長が寄贈先を代表して日本側へ心からの感謝を伝え、図書寄贈事業が日中の民間で文化・友好交流を促す働きを評価しました。この中で陳館長は、同事業は開始以来 16 年継続されており、今や海外から中国に図書を寄贈する事業で最大規模となっていると話しています。

笹川会長からは図書寄贈事業の開始と実施の歩みについて振り返りがありました。また歴史に関わる話題としては以下のような見方を述べています。日中双方は近現代史の見方が大きく異なる。日中の友好を促進するには歴史を忘れるべきではなく、日本人が反省するのは当然の筋だ。一方で二千年にも及ぶ交流の歴史から見ると、日中関係は非常に友好的なものであり、こうした長い友好関係を維持できている隣国関係は世界史上でも例がない。日中の経済関係は今や互いに深く依存しており、国民相互間の認識と理解を増進することが関係を改善する唯一の道である。そして両国の協力と交流が「経熱」を維持した上で「学熱」の面もプラスできることが期待されると結びました。

表敬訪問後の話の中で、陳進団長は、中国の大学が寄贈を受けた図書の種類は多く、科学技術や経済の図書は教育研究で効果的に利用されており、社会科学や人文科学の図書は日本研究にとても価値あるもので、マンガや芸術などの図書は若い学生達に大人気だと紹介しています。こうした文化の伝播や交流の活動は、中日相互が社会と発展の実情について深く理解するために役立ち、また民間での相互信頼と相違点の理解を築くためにも有益です。

五、蘭州大学が日本科学協会の寄贈図書の受け入れ体制を改善するために

1999 年以来、日本科学協会は「教育・研究図書有効活用プロジェクト」を通じて中国 52 大学の図書館に日本語図書 341 万冊を寄贈してきました。寄贈先のひとつである蘭州大学は同プロジェクト第六弾の対象で、2010 年以来 4.5 万冊の寄贈を受けています。このため本学の日本語文献資源が豊富になり、教員や学生が日本語の文学や各種専門の教育研究に大きな役割を果たしています。現在、盤旋路キャンパス図書館の 3 階に専用の閲覧室を開設しています。頂いた図書をどのように管理して十分に活用するか、そして今後の受け入れ体制をどう整えるべきか、素案を以下に述べます。

1、スタッフの留学と独学により日本語文献の図書目録を作成する人員を育成して、できるだけ早く既存の日本語文献をすべて図書館自動管理システムに組み入れます。この取り組みは現在進行中です。

2、学部に深く入り込んで、積極的に日本語文献の推薦とユーザーレイティングを展開し、できるだけ多くの教師と学生にこれらの価値ある日本語文献の活用を知ってもらい、既存資料の活用を図ります。

3、読者からのフィード・バックと交流のプラットフォームを作り、貸出分析を展開して、読者の動向を適時把握します。

4、インターネットのプラットフォームを利用して、日本語文献所蔵館の相互貸出サービスを作ります（もしくは CALIS 経由）。

5、中日両国で定期的または不定期に学術フォーラムを開き、大学間の相互交流を通じて寄贈図書の管理、

使用、人材育成などに関して共に向上を実現するよう提案します。

6、中日で館員を互いに派遣する交流活動を展開します。

日本訪問で得たもの

華中師範大学図書館　副館長　何小紅

日本科学協会のお招きにあずかり本プロジェクトに参加できたことを光栄に存じます。三十数館の他大学図書館責任者と日本の明治大学などを視察したことに対し深く印象に残り、何度も心打たれました。

ひとまず、日本科学協会にはとても感謝しております。勤務先も図書の寄贈を受けた図書館のひとつで、同協会から大量の貴重な書籍を頂きました。同協会は日本国内の出版社、企業、大学、研究機関及び個人から図書の寄付を受け入れ、分類整理して海外の大学や研究機関に無償で寄贈しています。これまでに同事業で中国53か所の大学や研究機関が寄贈を受けており､贈られた日本語および西洋言語は340万冊を超え、表敬訪問でのお話では100大学への寄贈を目標とされているとのことで、人類文明を伝承するという日本科学協会の使命感に拍手を送りました。

また、訪日視察の過程で、日本科学協会の図書寄贈事業は日中友好交流の架け橋であり、特に若い人の交流に重要な貢献をしているという認識も深まりました。日本財団が同協会の協力により行う図書寄贈事業は、中国が海外から受ける図書寄贈事業のうち最も大きいもので、中国の大学図書館、特に未発達地区の大学図書館に莫大な恩恵をもたらしているのです。表敬訪問した日本財団の笹川陽平会長は、長らく公益事業に尽力されてきた現代日本の民間公益事業のリーダーです。また日本科学協会の大島美恵子会長は16年も中国の大学図書館に書籍を寄贈する慈善行為を続けられており、とても敬服いたします。

訪日団は29日に東京を訪れ、明治大学図書館と東洋文庫の視察を行いました。30日午後には東京工業大学で日本科学協会と同大学附属図書館が共同で主催する「日中大学図書館フォーラム」に参加し、その後はこだて未来大学、北海道大学といった日本の大学図書館を視察して、また東日本大震災で津波の被害を受けた宮城県山元町も訪ねました。

視察した図書館はそれぞれ特長はありましたが、全体的に共通する特長は、資源の利用が人間性に基づいて、個性が豊かで、サービスが便利で迅速であるといったものです。建物が新しくモダンな館もあれば古びた館もありましたが、いずれも内装は完璧でした。設備面では、自動貸出・返却システム、セルフコピー機、検索用コンピューター、電子資料閲覧装置などがあり、建築面積や内装などではあまり中国の図書館と開きはないものの、至る所で人間本位が体現されていました。細かいところでは照明や回転書架の配置にも配慮がなされており、決して読者の動きを妨げない構成になっていました。しかも読者が最も必要とするところに配置されており、人間性に基づく配慮がとても周到なのです。被災地の図書館では、文化への関心に満ちた場所、人々が文化を目にし、広めていく場所なのだと深く感じました。人々に出会い、語らい、心の交流を提供する場所なのです。

最後になりますが、日本滞在中ずっと随行してくださった日本科学協会の顧文君先生、吉林玉果先生、宮内孝子先生に感謝を申し上げます。何日もガイドと付き添いを務めてくださり、ご苦労もいかばかりかとお察しします。この数日で、優れた品格と仕事ぶりを目にすることが多くありました。

まず先生方は仕事の進め方に秩序があり、時間を守られていました。数日間のスケジュールもきれいに順

序立てられていました。仕事への向き合い方は厳格そのもので、配慮が行き届いており、しかも業務内容にとても細かい見出しがついていました。仕事はとても手慣れた様子で冷静にこなされており、突発事態にもきちんと対処されていたので、とても仕事ができる方々なのだと思います。何日か共に過ごすうち、先生方に対して好意と依頼心が湧いてきました。とても礼儀正しく親切に接していただいたので、大事にもてなされていると感じられました。謙虚で上品ながら感情的でない先生方と過ごすのはとても快適で、貴重な友情も訪日の収穫だと思っています。

八日間の日本訪問では多くの収穫がありました。知識や見聞を広め、日本の先進的な図書館管理を学んだだけでなく、貴重な友情も結べたのですから。

仲夏の日本図書館漂流記

華東師範大学　図書館館長　胡暁明

一、「ママのプレゼント」

ママからのプレゼントがなくしちゃった
単純な喜びはどこに落としちゃったのかな
海は夢のようで
日差しのもとに広がる青い丘
童話のようなサファイヤブルーの海
じゃれあうカモメたち
はるか空の果ての雲海
一木一草
無数の星がまたたき
ふとそのプレゼントを開いた
その瞬間に戻った

——札幌から函館への道中にて

これは北海道でバス移動中に SNS のグループへ投稿した詩のひとつです。北海道の景色があまりに美しすぎて、心がその大自然に飛び込んでしまい、ひたすら快晴の青々とした山や川の中で夢中になっていました。

今回の旅行は中国の図書館代表団が日本の図書館を訪ねる八日間の日程で、中日図書館の発展傾向のフォーラム、寄贈元機関の訪問、地震被災地の図書館の視察を行い、そして東洋文庫や明治大学など 4 館の有名な高校図書館を見学しました。公立はこだて未来大学と北海道大学は最後の 2 館でした。

書籍の話をすると、中日両国には悠久の交流の歴史があります。近代以前の書籍は主に中国から日本へという流れで、唐代には日本の高僧が苦労して荒波を乗り越え、中国から貴重な経典を持ち帰りました。それから長崎の商船が毎日のように中国から磁器、絹製品、漢方薬の材料ともに、さまざまな古典を運び込みました。やがて日本でも中国の古書が翻刻されるようになります。日本の古典で有名な「五山版」は日本の「宋版書」で（去年、神保町の古本屋で五山版の古書を訪ね回ったのですが、きわめて稀少で、半ページも入手できませんでした）、日本の南北朝時代（中国では元から明に相当）に翻刻されたか改めて版木の彫られた

古典です。その頃の中国の古書は今日のハイテクに相当するもので、文明の賜物であり、東アジア社会の歴史の中で深く長く続く文明の秩序と人文の尊重をもたらす存在でした。

近代には世界のトレンドが逆転し、西洋文明の一人勝ちとなったため、日本は脱亜入欧で成功を収めます。そのため本についても別の物語が出てきました。日本から中国へ向かう書籍が増えたのです。文明における親への恩返しなのかもしれません。文明が年老いたものの、その育んだ後発文明が反対にたくましく生きのいい活力で古い文明に貢献していると言えませんか。近代には魯迅、章太炎、梁啓超、厳復などを含むたくさんの有識者が日本で改めて本を買い、まとめ、訳し、再創造して、文明の活力を輸入した例が見られます。本の物語は双方向のものへと変わったのです。

歴史を母親になぞらえるとしたら、中日両国に共通の母親は、漢字文化圏という悠久で広大な文化の大いなる伝統です。一衣帯水の「衣帯」とは、苦楽を共にする文明の絆です。両国が長い歴史の上で形成してきた文明が文明的に恩返する関係は、世界の歴史の中で唯一のものです。「ママ」の一番の「プレゼント」は本です。本は中日両国の人々と共に成長してきました。もし両国民が学習と交流をしなくなってしまったら、「ママ」の「プレゼント」はなくなってしまいます。よく考えてみると、冒頭の詩は、すばらしい風景の感化と呼びかけを受けて、自然に歴史の心を動かすところに触れていましたが、その日バスではっきりと気付いていたわけではありません。

幸いなことに、長年に渡って、日本科学協会はこうした文化交流の優れた伝統を受け継いでいるだけでなく、さらにレベルを高めて、中国に寄贈図書を無償で提供してくれています。1999 年から日本財団の委託を受け日本科学協会が実施している「教育・研究図書有効活用プロジェクト」（図書寄贈事業）の主な内容は、日本国内の出版社、企業、大学、研究機関、個人から寄贈を受けた書籍を整理し、分類して海外の大学や研究機関に無償で寄贈するというものです。同事業ではこれまで中国の 53 の大学や研究機関に寄贈を行っており、寄贈された日本語および西洋言語での書籍は合計 340 万冊を超えています。特に未発達地区の大学はこの計画により大いに利益を受けました。また本を縁に日本科学協会は何度も中日学生クイズ大会や作文コンクールなどの文化活動を行い、両国の学生と教員を相互訪問させる交流事業も行っています。 東日本大震災が発生すると、寄贈先である中国の大学やその関係者個人から日本へ約 730 万円の募金が寄せられました。全部で 6 回、中国大学図書館代表団が日本を訪問したのも本が縁の、民間で親しく付き合う大事なイベントです。これまで 100 人あまりの図書館館長とスタッフがこのイベントに参加しています。今の中日関係がやや低迷している背景の下で、民間の情誼はとりわけ貴重なことに見えます。今回このイベントに参加して肌で感じたのは、本の縁という物語が人を動かしたこと、本の後ろには人がいるという感情と生命です。文明の贈り物はまだ健在で、書籍は情が深いのです。

二、千秋の積水、万帙橋を成す

東京滞在中、長期にわたり図書を寄贈してくださっている株式会社講談社への感謝を述べる機会がありました。同社の寄贈図書はすべて新書です。去年は一大シリーズ出版物『中国の歴史』もあり、すべて名家の心がこもった作品で、とても人気があり、中国の読書会で熱いブームになりました。私が幸運にも中国大学図書館訪日団を代表して講談社の野間省伸社長に贈った題辞（記念の言葉）は「千秋の積水、万帙橋を成す」です。「積水」とは、唐代の詩人、王維が日本の友人である晁衡（阿倍仲麻呂）を見送ったときの詩「積水極むべからず　いずくんぞ滄海の東を知らんや」が出典で、のちに日本の友人を送別するとき常用されるようになった言葉です。荀子の「土を積めば山と為り　水を積めば海と為る」から引用した言葉でもあり、中日両国の人々が書籍を通じた交流でほんのわずかの水が蓄積されて海になるように、長期にわたり歴史の中

で形成してきた深い友情の象徴としています。この題辞の上には今回の中国代表団全員が直筆サインを書きました。訪問中、野間社長に「帙」の意味を聞かれたので、一冊一冊の本のことだと答えました。歴史上は両国の人々の深い友情があり、悠久の交流を持つ文明の大いなる伝統がありましたが、現代には一冊一冊の本こそが千年万年と続くすばらしき良縁となり、民間の知恵の橋、感情の橋、生命の橋となっているためです。

日本財団の笹川会長から代表団に頂いた講話も期せずしてこの題辞と呼応するものでした。図書寄贈事業そのものの話ではなく、歴史、政治、文化といったマクロな話から、図書の寄贈に話を戻されたのです。長期的視点を持って上から下まで筋を通す企業家は政治家の外交家の雰囲気を兼ね備えます。彼は歴史と現実の中日関係に対する見方として、「歴史を鑑とする」態度には二種類あるとしています。千年の友好的な往来の歴史と、痛ましい近現代史です。彼は歴史を断ち切ることはできないと述べています。日中双方は今のところ近現代史の見方が大きく異なっています。歴史を忘れるべきではなく、日本人が反省するのは当然の筋です。一方で二千年にも及ぶ交流の歴史から見ると、日中関係は非常に友好的なものであり、こうした長い友好関係を維持できている隣国関係は世界史上でも例がなく、大事にしていくべきものです。この見方が今の日本の民間で主流の考えを代表しているかどうかは分かりません。日中の経済関係は今や互いに深く依存しており、後戻りすることはできません。国民相互間の認識と理解を増進することこそが関係を改善し恒久の平和を守る根本的な道だという考え方は見識あってこそのものだと思います。そして笹川会長が切望されていることは、政冷経熱と言われる情況にあって、民間は大いに「経熱」を強め、さらに「文熱」をプラスすることですが、それは誰しも期待しているビジョンなのです。

三、天国のような図書館

今回「漂流」した日本の図書館は 5 館（うち 4 館が大学付属、1 館が地方の臨時のもの）でしたが、中でも北海道大学図書館は旧来型の図書館ながら先進的な設備があり、さらに充実した蔵書とサービスに特長がありました。他の館は精巧な現代的施設がさらに多く、細部に配慮がなされており、多様な機能と大胆に新機軸を打ち出す精神が見られました。山元町の「みんなのとしょかん」では、事物の背後に生き生きとした人々の命や心があるのを目にすることができ、これこそが図書館の魂のあり方だと感じました。

細かいところから話をすると、日本は創意工夫の大国です。自動車から日用品まで至る所に創意が見られます。自身も滞在中、感服せざるを得ない出来事を体験しました。6 月 20 日、浙江省の天台山でヤマビル 2 匹に咬まれました。5 日後には日本へ向かうというのに傷口に血がにじんで止まりませんでした。出国前に上海の病院で処置を受けたところ、薬を変える必要はないとのことでした。塗っても沁みず入浴もできる薬が日本にはあると聞いたのです。俗に「液体絆創膏」と呼ばれるその薬は、果たして中国人にとって「マストバイ」な一品でした。東京に着いた翌日に買って塗ってみると、2 分後にはシャワーを浴びられました。次の日も傷口が腫れることはなく、3 日目で皮下組織が再生したのです。奇跡のように感じました。図書館の視察でも気をつけてみると、創意発明と細かい配慮が至るところで見られました。たとえば以下のような点です。

壁に埋め込まれた傘立てと返却ボックス

椅子の背面から引き出せるテーブル

書架に搭載された照明

書架のスクリーンに表示される毎日の格言

鞄を置ける、キャスター付きの椅子

コンパクトなプロジェクター
USB メモリもマグネットも使えて字が書ける黒板
小枝のようにシンプルな読書灯と宝石のように輝く読書灯
一枚紙のような標識
タングラムのようなつなぎ合わせ方のバリエーション豊富な机
音が響かないよう机の縁に巻かれたカバー
薦めの言葉を綴る本立て
花びらや浮き輪のようなデザインの打ち合わせ席
あちこちで示された活用のヒント
フロアごとに深みを増す閲覧室の色調
……

最後の点は、細かい配慮がされている上、空間を作り出す領域に入っています。東京の都心部に位置する明治大学の図書館は「人と人とのつながり、人と資源とのつながり」を理念としており、明るく効率的、シンプルで機能的なところでした。他に印象深かった大学は北海道の公立はこだて未来大学です。文部科学省が提唱する個別化学習、主体的学習ベンチマーク校のひとつだそうです。大学全体として教員と学生、教育と研究、本学と図書館が一体に融合していました。建物は山に沿って建てられた透明な箱のようで、学生は丘陵で学問に励むという作りです。どこからでも広々とした草地、遠くの青い山々が見え、ときどき鳥の群れが飛んでいます。朝から晩まで、教員も学生もその中で自由にのびのびと、考え事、書き物、討論、指導を行っており、個々人のオンライン学習とグループ学習が結びついています。複数の空間と多様な学習方式が組み合わされ、隅々まですっきりと確実に理解できる仕組みです。息をするたび気持ちよく、自然の美や摂理と一つになれる感じがするところでした。

そして山元町の「世界一悲しくて楽しい図書館」にも深く感動しました。2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、非常に大きい地震が東日本を襲いました。高さ 8m から 10m もの津波が荒れ狂い、1 時間で美しかった山元町が蹂躙されてしまいました。私たちが訪れたときも、地震災害により壊れたところは完全な回復ができていませんでした。バスを降りて直面したのは暗い墓碑の塊と人影もまばらな荒れ地で、あたかも震災当時の空気を吸っているかのような感覚がしました。この心が痛む地で真っ先に再建された建物は二つあり、一つはお寺、一つは図書館でした。銀行も、市場も、役場もなくとも、お寺と図書館は絶対になくてはならないのです。お寺は意志の強い和尚さんがこつこつと自分の手で倒壊家屋の廃材を利用して再建し、そのことの心を打たれた日本各地のボランティアが手伝いに訪れました。図書館の館長は当地の一般住民でしたが、願望の力で、廃墟からどうにかこうにか小さな「みんなの図書館」を作り上げたそうです。図書館は 24 時間開放されており、中は清潔で落ち着きがあり本の香りがするということで有名になりました。被災で傷ついた地域の子供達の幼い心を蘇らせ、ひどく苦しみを受けた地域住民がやつれた心身を落ち着かせる場となったのです。「もしこの世に天国があるとしたら、きっと図書館のようなところでしょう。」山元町「みんなの図書館」で、図書館の存在意義を改めて目にすることができました。図書館の背後にある館長とボランティアの話も、図書館の魂というものを見せてくれるものでした。人の運命、人の関心、人の不撓不屈で抗争する精神…図書館ではそういった偉大な魂が、永遠にその神聖な命を託され継承されていくのです。

おわりに

私の日本図書館漂流記も、ここまで書いてきて手が止まりました。しかし、この八日間に日本各地で出会

った本や人、自然風景、美食美酒、すばらしい話の数々はずっと覚えていることでしょう。帰りのバスで、三つ話をするとしたら、初めに感謝、次にも感謝、終わりにも感謝になるという話をしました。顧先生の明るさ、中村さんの豪快さ、吉田さんと宮内さんの含蓄とまじめさ、たくさんの傘を用意してくれていたバスの運転手…同行した館長、同名だったガイド、訪問団の団長、訪問団のメンバー。夏のすばらしいひととき、日本の図書館を漂流したことは忘れられません。

猛烈に強い大型の台風が上陸すると言われつつまだ上陸していない上海にて

訪日感想

上海海事大学　流通閲覧部　主任助理　柳建華

2015 年 6 月 29 日～7 月 1 日、日本科学協会のお招きにあずかり、中国の大学図書館責任者一行 36 人と日本を訪れました。日本滞在中、明治大学和泉図書館と東京工業大学附属図書館で交流を行って、東洋文庫や、東日本大震災の被災地である宮城県山元町のみんなの図書館などを見学しました。より日本への理解を広めるためと、受け入れ側は可能な限り見学や交流の活動を手配してくれていました。東京はわずか 3 日間でしたが、日本の経済と文化の賑わいを鮮明に感じ取り、日本の大学図書館の先進的なサービスと人を基本にするサービスの理念を味わえたと思います。

明治大学図書館を見学し深く印象に残ったのは図書館入り口のさまざまな言語で「図書館」と刷られたガラス壁です。図書館は人類文明の中で人種、国家を超越するという寓意が込められ、また種族も国境もない一人一人の精神の郷里であることを表したものだと思います。中国の図書館と比べ、明治大学図書館は人に優しいデザインが多く見られました。たとえば動的空間と静的空間が分離されていると、静かに学習する人と討論エリアが干渉しあわずに済み、互いに利益を受けられます。またいろいろ親切な注意書きがあり、小さな三角形の電話ボックスも人が基本という思想を体現していました。図書館サービスについて語っていると、多くは大上段に構えてお金のかかることに話題が偏りがちで、読者に影響しそうな細かい点はおろそかにしやすいものです。日本の大学図書館は小さいところから着目するセンスに優れており、読者のため配慮の行き届いた様々なニーズを満たせる学習環境を作り上げることに全力を尽くしています。この点がひときわ感慨深いものでした。

東洋文庫を見学したとき、東洋の歴史の文献に関して、その収蔵システム、豊かさと多様化さに図書館スタッフとして敬服とうらやましさを感じました。1 冊しか現存していない珍しい古書も多く、その研究の価値をよりいっそう高めています。これは日本が歴史学の研究を重視した結果なのだと思います。

日本は地震の多い国ですが、今回は東日本大震災の被害を受けた宮城県山元町も見学し、当地の普門寺再建の過程、みんなの図書館の設立と開放の情況について知りました。何度か災難を経験すると、人々には心身を落ち着けられる場所が必要になるのですね。

日本では充実した新鮮な毎日を送れました。日本では通りや公共の場所がきちんとしていて、公共施設は整備され人に優しく、日本科学協会の皆さんや見学した大学図書館の皆さんが上品で礼儀正しく、時間を守り、丁寧で勤勉だったこと、すべてに良い印象が残っています。今回の日本の旅は一生忘れられません。今回の訪問に努力され苦労された日本側の皆さんに感謝し、中日両国民の友情の花がずっと開いていることを願っています。

訪日のまとめ

江南大学　図書館副館長　呉信嵐

2015 年 6 月 28 日～7 月 5 日、日本科学協会のお招きにあずかり中国大学図書館代表団に加わり、日中の図書館フォーラムに参加しました。

日本科学協会と東京工業大学附属図書館が共同で主催する「日中大学図書館フォーラム」では、東京工業大学の丸山俊夫理事、公益財団法人日本科学協会の大島美恵子会長から挨拶があり、千葉大学の副学長兼図書館館長の竹内比呂也先生、上海交通大学図書館の陳進館長、筑波大学図書情報メディア系の呑海沙織准教授、北京大学図書館の別立謙副館長、東京工業大学附属図書館の高橋栄一館長、大連理工大学図書館の楊海天館長らが、それぞれ「大学図書館の今後の発展－教育・支援の学習機能を中心に」、「未来思考の革新のモデルチェンジ」、「学習の共有空間と学生の助手」、「北京大学図書館の世界一流に向けた 2014-2018 行動計画の概要」、「研究型大学の電子ジャーナル」、「大連地区高等教育機関の日本科学技術協会寄贈図書の情況の総括および提案」をテーマとする講演を行い、共通の関心事である電子ジャーナルの購入方法、印刷版と電子版との重複の回避、電子版と印刷版のコスト比率について討論しました。討論では、円安と消費税納付が原因で電子ジャーナルの購入予算が圧縮され、2014 年から一部の主要大学でエルゼビア（Elsevier）の定期購入を解約し都度購入する形態に戻ったとの情報があり、本学でも海外刊行物と国内データベースの値上げによって購買戦略の調整と困難な価格交渉があったことを思い出しました。日本側参加者から紹介があった能動的学習空間の理念と方法には深く啓発を受けました。3 年間で日本の大学における能動的学習空間は 2.5 倍増加しているそうです。多元的総合的な学習資源を構築し、図書館、IT、教員が共同で学生の学習に支援を提供するモデルは参考になります。

代表団一行 35 人は日本財団本部で同財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島美恵子会長と会見し、日本財団と日本科学協会が 16 年来中国の大学図書館に 340 万冊以上の本を寄贈してきた慈善行為に対する感謝を伝えました。日本財団の笹川会長は、図書寄贈事業によりもっと多くの中国人が日本に対する理解を深めてほしいと述べられました。日本科学協会の大島会長は、寄贈した図書が十分に活用されていることについて寄贈先図書館への感謝を述べ、代表団が今回の訪日を通じて日本を全面的に理解して、図書館だけでなく、民間交流の領域でも日中の友好に貢献してもらえるよう望んでいると挨拶されました。1999 年から日本財団の委託を受け日本科学協会が実施している「教育・研究図書有効活用プロジェクト」（図書寄贈事業）の主な内容は、日本国内の出版社、企業、大学、研究機関、個人から寄贈を受けた書籍を整理し、分類して海外の大学や研究機関に無償で寄贈するというものです。同事業ではこれまで中国の 53 の大学や研究機関に寄贈を行っており、寄贈された日本語および西洋言語での書籍は合計 340 万冊を超えています。そのうち江南大学が頂いたのは 19.5 万冊で、本学の日本語専攻と重点学科の日本語、英文蔵書が充実し、日本の学術研究と文化に対する教員や学生の理解を増進しています。

訪日中、代表団はまた明治大学図書館、東京工業大学附属図書館、公立はこだて未来大学図書館、北海道大学図書館、地震の被災地と「みんなの図書館」、東洋文庫を見学して、日本の大学図書館に対する理解を深め、地震被災地区図書館が図書館というものに与えた新たな意味を知りました。今回の学術交流では、日本の大学図書館に対する認識が高まりました。日本の図書館設計における省エネ自然採光の理念、図書館内の標識の細かさと全面性、アクティブラーニング・スペースの理念などには深く啓発を受け、豊富な資料を収集することもでき、予期していた学術交流の目標を達することができました。

訪日交流での収穫はたくさんありましたが、最も感動したのは、日本科学協会を通じて公益活動、公益事業はライフワークとしてできるのだと悟ったこと、一冊一冊の寄贈図書に多くの人の苦労とすばらしい願望が凝縮されていることです。大学で最も印象深かったのは公立はこだて未来大学で、工業情報分析を人材のゆりかごと位置づけたキャンパスの建築、配置、学科の設置、学習空間などがすべて唯一であると思います。

今回の学術交流にはメディアの関心も強く、中国語では人民日報/人民網、新華社/新華網、亜太日報、中国青年報/中青オンライン、法制日報/環球-法制網が「中国の大学図書館が日本を訪問し交流」を報じています。日本語では中国国際放送局、人民中国雑誌、河北新報、みんなのとしょかんなどが「中国の大学図書館が日本を訪れ交流し被災地を視察」を報じ、中国の 35 サイトに転載されています。大学図書館の果たす文化交流の機能は誇らしいものです。

改めて日本科学協会と各大学、関係スタッフの周到な計画と細かな配慮に感謝します。日本人の上品さ、前向きな強さ、街の清潔さ、整然とした交通秩序など、忘れられないでしょう。

「中国大学図書館責任者訪日交流」に参加して

井岡山大学図書館　副館長　王喜和

日本科学協会の招待に応じて、2015 年 6 月 28 日～7 月 5 日、「中国大学図書館担当者訪日団」一行に参加しました。活動内容を以下にまとめます。

一、イベントの背景

日本科学協会は 2010 年から井岡山大学に図書の無償寄贈を行っています。これまでに 3300 冊余りが贈られ、そのほとんどは日本語原書です。2015 年 3 月に井岡山大学は日本科学協会の正式な図書寄贈先大学となりました。

寄贈図書を受け入れる中国の大学や研究機関の図書館スタッフが多面的に日本を理解できるよう、また日中間の学術交流を促せるよう、日本科学協会は 2001 年から 5 回にわたって、「中国大学図書館責任者訪日交流」イベントを催し、寄贈先図書館の責任者を日本に招いています。訪日での主な活動内容は、日本の各種図書館の視察、図書館関係者との情報交換、フォーラムの開催などです。今年の同イベントは 6 回目です。訪日団は中国の図書寄贈先 32 機関の責任者 35 名で、教育部全国高等教育機関図書館業務委員会の副主任委員でもある上海交通大学図書館の陳進館長が団長を務めました。

二、活動日程

2015 年 6 月 28 日午後に訪日団 35 名がそれぞれ北京、上海、大連と広州から出発し、当日の夜に東京で合流しました。

6 月 29 日は午前に明治大学図書館を見学し、午後には東洋文庫の視察を行いました。

6 月 30 日の午前、日本科学協会が所在する日本財団ビルを訪ね、午後には東京工業大学を見学して、同大学図書館と共同で「大学図書館の変革と発展」をテーマとする日中大学図書館フォーラムを行いました。フォーラム後には、東京工業大学の催す懇談会に参加しました。

7 月 1 日は、バスで 2011 年の東日本大震災被災地に向かい、復旧の情況を見学しました。仙台市山元町に設けられた臨時図書館が重要な訪問先でした。その夜には飛行機で北海道札幌市に移動。

7 月 2 日は、バスで函館市に向かい、午後はこだて未来大学の図書館を見学し、函館に宿泊しました。

7 月 3 日は、バスで札幌に戻り、午後に北海道大学の図書館を見学しました。

7 月 4 日は、北海道旭川地区の農村を観光しました。

7 月 5 日は、札幌から東京経由で帰国しました。

三、訪問の情況

訪日団の視察した重点は日本の大学図書館の管理やサービスの革新的な実例です。どの館でも全館を見学

しただけでなく、その館のスタッフとの交流や討論の時間が設けられました。また 6 月 30 日には東京工業大学図書館と共同で「大学図書館の変革と発展」をテーマとする日中大学図書館フォーラムを行っています。訪問活動の概要は以下のとおりです。

1、日本財団本部の訪問

6 月 30 日、代表団は都内の日本財団本部を訪れ、図書寄贈事業の提唱者である日本財団の笹川陽平会長と実施者である日本科学協会の大島美恵子会長と面会しました。訪問団団長の上海交通大学図書館陳進館長、日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島美恵子会長からそれぞれ挨拶がありました。

訪日団による日本財団ビル訪問は、メディアでも取り上げられました。中国では『人民網』、『新華網』、『中青オンライン』日本では『河北新報』などのメディアがこの会見について報じています。

2、明治大学図書館

明治大学は 1881 年に創設された私立の総合大学で、これまで社会に送り出した卒業生は 49 万人を上回ります。明治大学は 4 つのキャンパス、10 の学部、53 の学科、17 の大学院課程を設けており、2015 年の在校生は 3.5 万人強とのことです。

明治大学の図書館は 4 つのキャンパスに 4 つの図書館が分布しており、総建築面積は 4 万平米余り、蔵書は 230 万冊以上、新聞雑誌は 2 万数種類です。2014 年、明治大学は世界最大のマンガ図書館である東京国際マンガ図書館を設立しています。訪日団が今回視察した和泉図書館は主に文系の一、二年次の学部生と大学院の教養デザイン研究科を対象としているため、関連資料はそろっており、特に人文と社会科学類に関する蔵書が大量にあります。また、明治から昭和初期までの文学書の初版本コレクション「日本近代文学文庫」があります。和泉図書館は「入ってみたくなる図書館」を目指して作られており、人と人、人と情報、そして本学と地域社会・国際社会との架け橋を通じて世界に開かれた大学の実現に貢献すると提唱しています。長時間滞在型の図書館として、館内にはカフェ、ギャラリー、ラウンジといった個性的な施設が配されています。館内では無線 LAN を使うことができます。

訪日団は明治大学和泉図書館を見学後、管理やサービスに関する問題について同館のスタッフと質疑応答形式での交流を持ちました。

3、東洋文庫

東洋文庫は 1924 年に設立された日本最大（世界第 5 位）のアジア研究図書館で、日本の三大漢学研究要衝の一つでもあり、中国と中国文化を主要な研究対象とする専門の図書館兼研究所です。1948 年から国立国会図書館の分館となっています。

東洋文庫の所蔵資料は 95 万冊で、中国、日本、朝鮮、モンゴルその他のアジア地域に関する文献の割合が最も大きくなっています。なかでも大量の中国の典籍と史料はとりわけ貴重で、中国の地方誌と叢書約 4000 部、中国の方言辞典 500 数冊、中国の家系図、清版満州・モンゴル文字の書籍、中国探険隊の報告書、中国の考古学資料、『順天時報』、『華北正報』、各種バージョンの大蔵経その他のチベットの文献 3100 点などがあります。唐代の写本『毛詩』の一部、『古文残巻』、敦煌文書、康熙、光緒 2 代の『皇帝実録』などの稀覯本は世界中でも滅多にないものです。蔵書には国宝や重要文化財に指定されているものが多くあります。

東洋文庫には図書部のほかに研究部もあり、兼職あるいは専任の東洋文庫の研究員を擁して、『東洋文庫欧文紀要』、『東洋文庫和文紀要』（東洋学報）、『東洋文庫論叢』、『東洋文庫欧文論叢』などの雑誌や叢書を編集出版しています。研究部には敦煌文献、チベット、中央アジア、イスラムなどの研究班が設けられています。このうち、敦煌文献研究班は『西域出土漢文文書の分類目録初稿』4 冊、『敦煌トルファン社会経済

文書集』を編纂し、チベット研究班は『スタイン蒐集チベット語文献解題目録』12 冊を編纂しています。1961 年、同文庫はユネスコの要求に応じて東アジア文化研究センターを付設しました。同センターが日本の他の文庫との最大の違いでもあり、東洋文庫が日本の学術界で高い名声を得ている重要な要因のひとつでもあります。

訪日団は東洋文庫の図書部、モリソン蔵書を見学し、博物展の重要文化財をいくつか展覧しました。

4、東京工業大学図書館

東京工業大学は 1881 年に創設され、3 つのキャンパスがあります。3 つの学部、30 以上の専門が、大学院には 6 つの研究科、25 の専攻が設けられており、研究者である教員 1500 名以上と在校生 1 万名以上が在籍しています。東工大は工学と自然科学研究を主とする日本トップ、世界でも一流の理工科大学で、情報科学、生命科学、経済学、数学、物理、化学などの学科は世界でも高い名声があります。建学以来、東工大は日本と世界のためノーベル化学賞受賞者白川英樹博士を代表とする多くの優秀なエンジニア、学者、実業家を育成してきました。

東工大図書館は本館と分館から構成され、総面積 1.2 万平米余りで、蔵書は 80 数万冊（件）、新聞雑誌は 1.6 万数種類（うち外国語の新聞雑誌 1.3 万種類余り）で、自然科学と工学関連が主体です。東工大図書館は科学技術類の定期刊行物が日本で最も豊富にあり、日本に 3 つある国家外国語定期刊行物センター国に指定された外国雑誌センター館のひとつです。

訪日団は東工大図書館では本館を見学した後、関係する館員と機関のナレッジベースの構築、学生の自主学習を支援する図書館のサービス、デジタル図書館の構築などの問題について交流を行いました。

5、「大学図書館の変革と発展」フォーラム

6 月 30 日、訪日団は東京工業大学図書館と共同で「大学図書館の変革と発展」をテーマとする学術フォーラムを行いました。フォーラムは東工大図書館の加藤晃一事務長が司会を務め、東工大の丸山俊夫副学長、日本科学協会の大島美恵子会長からそれぞれ開会の挨拶がありました。基調講演は千葉大学の竹内比呂也副学長、上海交通大学図書館の陳進館長が行いました。筑波大学、東京工業大学、北京大学、大連理工大学などの代表がそれぞれ大学図書館の体系刷新、学科サービス、学生の能動的学習をサポートする共有空間の建設、デジタル資源と印刷物資源の管理、未来に向けた図書館の計画といった内容について報告とディスカッションを行いました。最後に、フォーラムに参加した中日両国の図書館関係者が図書館のサービスと教育研究、図書館の情報分析、デジタル資源体系の構築などの内容について討論を行いました。

その夜、訪日団は東京工業大学の催す懇談会に招かれ、東工大の三島良直学長も出席しました。

6、2011 年の東日本大震災被災地の臨時図書館

7 月 1 日、訪日団は被害が深刻な地区の仙台市山元町を訪れ、この地区で臨時に設けられた図書館を視察しました。2011 年 3 月の地震と津波からすでに 4 年も過ぎましたが、山元町の地区再建と被災者帰還事業はあまり進んでいません。当地には 3000 数戸が暮らしていましたが、戻ってきたのは 300 数戸にとどまっています。しかし、緩慢な再建の過程で、現地の住民は民間と日本各地からのボランティアの力によって寺院を再建し、臨時の図書館を設置して「みんなのとしょかん」と命名しました。

とても小さい図書館ですが、寄付により 8000 冊余りの蔵書と 40 席余りの閲覧席があります。図書館は地域の人々が交代で管理し、毎日 24 時間オープンしています。何故このような図書館を優先的に設けようとしたのか館長に尋ねると、戻ってくる住民には心を落ち着けられる場所が必要であり、災難を経験した人々には集まって慰め合う交流の空間が必要だからとの答えでした。簡潔な答えの中から、日本人の使命感や精

神力への強い希求を訪日団の全員が感じました。こうした図書館は被災地に十数館あるそうですが、訪日団が視察したのはそのうちのひとつに過ぎません。

7、はこだて未来大学図書館

はこだて未来大学は 2000 年に設立された特色のある公立大学です。学食と寮を除くと大学には建物が一つしかなく、すべての機能が棟内に集められています。この大学では情報通信と技術に関連する人材を専門的に育成しています。現在は 1 学部 2 学科と大学院 1 専攻があり、在校生は 1200 人強です。大学のモットーは「オープンスペース、オープンマインド」です。この原則は一棟建ての施設だけでなく、大学の設備、教育スタイルや研究内容にも表れています。はこだて未来大学は第三世代の新しい教育制度を存分に体現しており、独自の教育モデルに多くの国からさまざまなタイプの学生が集まってきていることも、日本国内の他大学を驚かせています。

まさにその独特な教育理念と構造により、はこだて未来大学に設けられた図書館には本学のその他の機能との厳格な区分がありません。8 万冊余りの蔵書を持つ書庫だけが例外で、大学のすべての教室、研究討論室、教員事務室、学生活動室がすべて図書館の外延空間となっています。そして図書館のサービスもすべて本学の教育研究活動に組み込まれています。4 名の専任スタッフは書庫の管理と文献の貸出・返却処理しか担当していません。文献情報資源の教育研究向けサービス機能は大多数が教員や研究者が担っているのです。見学後の座談会で、同大学の中島秀之学長は、はこだて未来大学図書館の価値は「学生の能動的な学習を支える」ためにきわめて特徴のある個性的な学習共有スペースを提供することにあると言明しました。講義内容よりも重要なのは、学生が図書館で学習や研究の方法を見つけられるよう大学側が望んでいることです。これは文部科学省が 2010 年から提唱している図書館のサービスの方向性ですが、同大学のオープンな教育の理念にもちょうど合致しています。

8、北海道大学図書館

北海道大学は 1876 年に創立され、日本で初めて学士号を授与した国立の総合大学で研究機能も備えています。北海道大学は北海道の札幌市と函館市にキャンパスがあり、12 の学部と 18 の大学院研究科、3 つの付属研究所、3 つの全国共同教育研究施設のほか、たくさんの学内共同教育研究施設があり、学部、研究科の数が日本で最も多い大学です。同大学は「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」を教育研究の理念としており、学部生と大学院生の合計で 18000 人が学んでいます。留学生のうち中国からの学生が 55%を超えています。教職員は約 4000 人で、鈴木章教授は 2010 年にノーベル化学賞を受賞しています。同大学の公開講座では全世界に向けて 130 以上の講座が提供されています。同大学はここ数十年で、生命科学、人文社会科学、経営管理、哲学などの分野で多くの優秀な人材を輩出してきました。

北海道大学図書館は本館、北図書館、部局の図書室などで構成されており、蔵書は 388 万冊（うち外国語図書 180 万冊）で、日本で最も全面的な農業類の文献資料と北方（北海道を中心とするアジア太平洋北東地区）資料を特色とする、日本でも重要な学術型図書館のひとつです。文献資料の全面的な収集を重視しているほか、同図書館は学生の能動的な学習に向けた多元化、個性化した空間の提供に力を尽くしています。教育と研究にマンパワーでの支援を提供して教員との連動体制をとっており、「学習・研究支援情報」を通じて学習会を開き、学科の報告書を発行するなど、図書館と本学の教育研究業務を一体としています。同館は館員の学歴、学力、外国語のレベルを重視しており、デジタル資源の構築、さまざまなタイプの文献資源の統合といった面で北日本の大学を代表する存在となっています。

図書館を見学した後、訪日団員は北海道大学図書館の一部スタッフと短い個別交流を行いました。実施中

の課題研究と合わせ、私は北海道大学図書館や日本の他大学の図書館と博物館、文書館との協力に関する情況を理解しました。

四、観察と考察

今回の視察交流活動では 6 日間で 5 つの図書館を見学し、また学術フォーラムも行いました。事前に用意していた訪問の目的は 2 つあります。ひとつは井岡山大学図書館の新館の建設とサービスの構築の参考とするため、日本大学図書館の関連する施設とサービス体制を見学すること。もうひとつは個人として研究中の課題に関する事例とデータの取得です。しかし多忙なスケジュールで訪問先との交流はほとんどが短時間だったため、前者の目標については見学中に観察し考えたことから得たもののほうが多くなりました。

第一に、厳格で秩序がある人間本位の社会文化は日本社会の各方面に浸透しており、大学やその付属図書館できわめてよく見られました。

日本人が厳格で秩序を尊び規則を遵守するという特長は広く知られていますが、日本で自ら感じ取り、その印象はさらに強くなりました。東京に着いて日本側から渡されたスケジュールには驚きました。すべての予定について時間の精度が分刻みだったのです。行程は厳格にスケジュールどおり進められ、ほとんど狂いはありませんでした。大学や図書館の施設は整然と並んでいて、清潔で、館員によるサービスは専門的で、集中した態度でした。交流の過程で気付いたのは、どこの図書館でも運営に厳格なマニュアルと流れが設計されているということです。日常業務で作成される様々な資料や文書は喜んで見せてくれました。その中から、規則やマニュアルが日本の大学図書館サービスの基本的な拠り所のひとつであり、規則やマニュアルを厳格に守ることが彼らの誇りであることが分かりました。

図書館が読者を尊重し愛護しているということにも深く感銘を受けました。どこの図書館を訪れたときも例外なく最初に告知されたのは、撮影はしてもよいが学生や教員は避けるようにとの注意でした。図書館の施設は読者に便宜を図ることを原則にレイアウトされています。多くの細かいことでこうした原則が活かされていました。たとえば一部の図書館では夏に合わせて涼しく過ごす、暑気払いをする本の特設コーナーを設けていました。読者が蔵書を速やかに把握できるよう、書架を傾けている館もありました。詳しく直観的な案内表示の記されたフロアガイドまでありました。図書館の館員が読者に言及するとき、大部分は「うちの学生、うちの先生」で始まっていました。ここから、大学が学生や教員を愛しており誇りにも思っていることが伝わってきます。こうした感情はまさに中国の大学やその図書館で涵養と改善が早急に求められている人道的配慮です。

第二に、大学図書館の価値は蔵書の知識構成とサービス精神の中に現れていました。

今回の視察で訪れた日本の大学には有名校も創立して間もないところもあります。大学図書館だけでなく、民間や研究機関の図書館も訪れました。訪問した図書館の施設、設備などのハードウェアは中国の大学図書館や一部の公共図書館と比べての違いが余りありませんでした。むしろもっと先進的なハードウェアを持つ中国の図書館もあります。しかし、蔵書の品質、サービス体系、サービス水準、館員の職業精神などの面でのギャップは明らかです。

日本の大学図書館の蔵書資源は教育や学科の建設と密につながっており、所蔵文献の購入に対して教員や学生が大いに関与しています。また、ほとんどすべての大学図書館のホームページに推薦図書欄があります。多くの大学図書館で、新着文献資料に読者から推薦されたものが高い割合で入っています。このため、所蔵文献の利用率と蔵書の質に対する読者の満足度がいずれも高いのです。また、明治大学、北海道大学といった歴史ある総合大学では蔵書の全面性が非常に重視されています。中華民国の頃に出版された『福建三明地

方志』を明治大学図書館で、80 年代の『青島海洋大学学報』を北海道大学図書館で見かけました。その蔵書収集の深さと全面性にはとても感動しました。

日本の大学図書館のサービス体系は中国の大学図書館と似ていて、文献貸出のほか、リファレンス、学科サービス、情報の分析、文献の転送、デジタル資源の普及、ユーザー研修などの内容は基本的にカバーしています。違いはというと、日本の大学図書館のサービスのほうが精密で、教育研究業務により深く介入していることです。たとえば東京工業大学では教員が実験室で文献の需要を提出すると、30 分以内に同一キャンパスの図書館の館員がその本を届けます。北海道大学の学生は数日あれば東京大学図書館の蔵書を手に取ることができます。はこだて未来大学の教員は直接図書館の館員として、講義で図書館の文献資源の支援を得ています。日本側の紹介と展示の中から、館員の職業精神と専門能力が核心的な効果を発揮していると感じました。しかし、こうした職業精神や専門能力がどこから来て、何が励みなのかは、時間の問題で深く理解するには至りませんでした。

第三は、デジタル化の波の衝撃に積極的に対応し、サービス領域を広げ、サービス方式を変革していることです。

他の国と同じように、日本の大学図書館も現在も生活のデジタル化、学習方法の変革という衝撃に直面しています。図書館学界の分析の結論では、デジタル出版とデジタル文献の急速な増加、電子書籍の閲覧とモバイルリーディングの急激に発展はすでに全世界の現象になっています。情報源の多元化と情報の需要の個別化も生活や学習のスタイルとして定着してきました。もはや閉鎖的な空間の管理と実体の所蔵文献だけに頼っていては、図書館が読者に対して十分な吸引力を生むことはできないのです。読者の図書館離れを防ぐには、サービスの機能を増やし改善して、機能の合理化に努めなければなりません。

日本の大学図書館はこうした変化のすさまじい勢いに気づき、積極的に対応策をとって図書館サービスを変革しています。日本政府もすみやかに大学図書館のサービス変革に対する指導をしています。文部科学省は 2010 年に「大学は学生の能動的学習に対する支援を強化するべき」という通達を出しました。2014 年末現在、日本全国の 388 大学のうち 46%の大学図書館はオープン、多元的な、学生の個別の学習に適応して学生の学習能力と研究能力の涵養に役立つ学習共有スペースを作り上げています。そのほか、各大学図書館は各自の実情に応じた探求や試みも行っています。明治大学図書館は新館を建設する時、「入ってみたくなる図書館」図書館の建設をコンセプトにして、また学生の活動の特徴に基づいて「音の漸進的変化による図書館サービスの配置」という理論を打ち出しています。東京工業大学図書館は 2011 年の新館建設と合わせて従来の管理モデルを打ち破り、オープンでカジュアルな討論交流機能を備えた空間の設置により図書館内部の配置と機能設定を再構築しています。東洋文庫は貴重な文献を大量に収集しているだけではなく、それらの文献を基礎に有名な漢学研究機関となっています。同時にコレクションを基礎とした展覧と社会教育機能も派生しており、東京ひいては日本でも有名な博物館・展覧館となっています。北海道大学図書館は本館でサービスを展開しているほか、部局の図書室を各教育棟に設け、全学の読者に開放しています。はこだて未来大学ではさらに教育研究活動と図書館のサービスを完全に統合しており、図書館サービスの場所が教室、研究室、実験室と一体になっています。

上述の観察は表面をざっと見ただけのおおざっぱな理解に過ぎません。しかし、これを入口に深く考え研究すれば、きっと本学の新図書館の建設に対してかなり参考にできるはずです。そしてそれこそが、私たちの努力し続けるべき方向です。

訪日感想

吉林大学珠海学院　図書館　館長　楊麗輝

2015 年 6 月 28 日～7 月 5 日、日本科学協会のお招きにあずかり、吉林大学珠海学院図書館を代表して中国大学図書館責任者代表団に参加し、日本の大学図書館を訪問し交流を行いました。代表団は日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島会長との会見もしました。日本科学協会の図書寄贈事業責任者、顧文君さんを初めとする皆さんが心を込めてスケジュールを計画してくれたこと、視察交流活動を綿密に手配してくれたこと、日程を通して随行してくれたことにとても感動しました。心より感謝を申し上げます。

明治大学和泉図書館、東京工業大学附属図書館、公立はこだて未来大学図書館、北海道大学図書館、東洋文庫の視察では、見るもの聞くものがすべて新鮮でした。先進的な施設とサービス理念には、図書館が重視されていることと読者に対する配慮が表れていました。各種のネットワークデータベースの誕生と急速な発展について、図書館にもたらされる衝撃と大学図書館の未来および発展に対して中日双方の図書館責任者が深い交流と探求を行ったことは、今後の業務の指針となります。

日本を訪れたのは初めてだったので、短い日程ながら行く先々が印象に残りました。資源の節約、環境の保護と管理、公民の素質、仕事熱心さなどが印象に残っています。参考にすべき点もあり、中国はこうした点で任重くして道は遠いのだと深く感じました。

今回のイベントは、日中両国の大学図書館責任者が友好交流する貴重な機会とプラットフォームで、日本科学協会と中国の大学図書館が図書寄贈事業を共に改善するのを促進し、寄贈図書資源の働きを十分に発揮させ、双方の友情増進にプラスの影響と効果を生じたと思います。今後もこうした機会があれば参加したいと希望しております。

日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島会長、ありがとうございました。日本科学協会の図書寄贈事業責任者、顧文君さんを初めとする皆さん、ありがとうございました。お時間のある時こちらにも是非いらしてください。心よりお待ちしております。

本で縁を結び、本に従って友達の輪を広げ、本のために努める

中国農業大学図書館　副館長　韓明傑

今回の訪問を通じて日本科学協会の図書寄贈事業関係者、多くの中日の図書館の責任者と知り合い、何日もの交流で友情を深め、貴重な経験を学ばせてもらえたことが私にとっては最大の収穫でした。

日本科学協会の中国大学図書館に対する図書寄贈事業についても全面的に知ることができました。同協会は 16 年来、中国の大学図書館 52 館に 340 万冊以上を寄贈してきましたが、まだ寄贈先の件数と寄贈図書の冊数の拡大に努めているそうです。同協会の中日文化交流に対する貢献と、同事業関係者の真摯な態度、謹厳な仕事ぶりに深く敬意を述べたいと思います。

日本科学協会は寄贈図書が効率よく利用されるためにもさまざまな努力をしているのだということを深く悟りました。寄贈された図書の掲示や報道の水準が上がるよう期待するとともに、CALIS の日本語総合目録の作業プラットフォームを利用してそのための取り組みをしようと思います。このプラットフォームを利

用すると、各館が自館の書目を作成すると同時に中国高等教育保障システムの総合目録と日本国立情報研究所の総合目録構築もできます。

東京工業大学で催された「大学図書館の変革と発展」をテーマとする日中大学図書館フォーラムでは、中日の図書館の学者との研究討論を通じて、経費が非常に不足し電子資源が値上がりし続けている状況に直面した各館の文献資源の構築に関する対策とやり方を学び、学習空間、学科サービスなどのサービス革新に関する構想を広げることもできました。

東洋文庫と各大学図書館の訪問では、図書館の管理と読者サービスの面での彼らの仕事の精密さと厳格さを学び理解しました。特に新しく開館した明治大学和泉図書館の機能配置とサービス項目は、わが校の新館建設整備業務にとって大変啓発と参考にする意義がありました。公立はこだて未来大学図書館は学習空間が本学の教育に適合しており、教員や幹部が図書館の仕事を強く認識し、学習空間の利用効率がよいため、学習空間を構築する意味と効果についてのとても良い解釈となっていました。

本で縁を結び、本に従って友達の輪を広げ、本のために努める

中国農業大学図書館　副館長　韓明傑

今回の訪問を通じて日本科学協会の図書寄贈事業関係者、多くの中日の図書館の責任者と知り合い、何日もの交流で友情を深め、貴重な経験を学ばせてもらえたことが私にとっては最大の収穫でした。

日本科学協会の中国大学図書館に対する図書寄贈事業についても全面的に知ることができました。同協会は 16 年来、中国の大学図書館 52 館に 340 万冊以上を寄贈してきましたが、まだ寄贈先の件数と寄贈図書の冊数の拡大に努めているそうです。同協会の中日文化交流に対する貢献と、同事業関係者の真摯な態度、謹厳な仕事ぶりに深く敬意を述べたいと思います。

日本科学協会は寄贈図書が効率よく利用されるためにもさまざまな努力をしているのだということを深く悟りました。寄贈された図書の掲示や報道の水準が上がるよう期待するとともに、CALIS の日本語総合目録の作業プラットフォームを利用してそのための取り組みをしようと思います。このプラットフォームを利用すると、各館が自館の書目を作成すると同時に中国高等教育保障システムの総合目録と日本国立情報研究所の総合目録構築もできます。

東京工業大学で催された「大学図書館の変革と発展」をテーマとする日中大学図書館フォーラムでは、中日の図書館の学者との研究討論を通じて、経費が非常に不足し電子資源が値上がりし続けている状況に直面した各館の文献資源の構築に関する対策とやり方を学び、学習空間、学科サービスなどのサービス革新に関する構想を広げることもできました。

東洋文庫と各大学図書館の訪問では、図書館の管理と読者サービスの面での彼らの仕事の精密さと厳格さを学び理解しました。特に新しく開館した明治大学和泉図書館の機能配置とサービス項目は、わが校の新館建設整備業務にとって大変啓発と参考にする意義がありました。公立はこだて未来大学図書館は学習空間が本学の教育に適合しており、教員や幹部が図書館の仕事を強く認識し、学習空間の利用効率がよいため、学習空間を構築する意味と効果についてのとても良い解釈となっていました。

細部が品質を決定する

中国農業大学　教授　李晨英

中国高等教育文献保障システム(China Academic Library & Information System,略称 CALIS)オンライン目録センターの日本語オンライン目録プロジェクトチームメンバーとして今回の訪日活動に参加でき光栄です。この数日で最も強く感じたことは、細部が品質を決定するということです。

日本科学協会はイベントの主催者として交流の対象と内容を入念できめ細かく計画してくれたため、タイプも地域も異なる 32 の大学図書館からやってきた私たちスタッフが、日本の大学図書館の経験を学び、業務改善のヒントを得ることができました。特に、見聞きした中での日本人が細部を大事にする態度と仕事ぶりが深く印象に残っています。明治大学和泉図書館では、優しい光でさまざまな様式の、ちょうどよい位置に置かれた照明設備、エルゴデザインに満ちた机と椅子、そして多様な形式で必要なとき見つけられる読者向けの注意書きなど、人を基本にする設計思想と読者とにサービスする理念に出会い、図書館内にも暖かみのある快適な環境が作り出せるのだと身にしみてよく分かりました。主に金属材質で建てられた、建築の風格が本学の特徴と渾然一体の東京工業大学大岡山図書館で開かれた「図書館の変革・発展フォーラム」では、中日両国の先進図書館の発展方向を代表する上海交通大学図書館と千葉大学図書館の各館長からすばらしい報告があり、両国の図書館スタッフが百方手を尽くして環境に順応して変わっていき、読者に高レベルで精細なサービスを提供するため努力している様子が理解できました。津波の被災地で地元住民が心を落ち着ける聖地となっているみんなの図書館、北海道大学附属図書館内の「避難用具」室、非常窓、電話スペースといった細部からは、私達がしなければならない仕事やすべき仕事が多く見つかりました。公立はこだて未来大学では、至る所にオープンな学習、オープンな思想教育という理念による学習環境、カリキュラム設定、実験条件があり、実は大学図書館がオープンな学習の面でより多くの力を発揮できるということに気づきうれしくなりました。

学習交流以外にも、イベントの組織者は生活の細かい面で行き届いており、身をもって深く日本の文化と生活の質を経験させてくれました。そのおかげで参加者はこの機会を十分に活かして日本を理解できたと思います。細部まで完璧を追求してくれたおかげで、全員が楽しく訪日の 8 日間を過ごし、たくさんの収穫を得て帰ることができました。

細部を大事にするという態度は、仕事の中では打ち込む態度と専門性に表れてきます。日本科学協会と図書館関係者の皆さんは現実を起点に大きいところから着眼し、小さいところから着実に仕事を進められていたので、今後はそこから学んだ経験を私たち自身の仕事に活かしていきます。初めに考えたいのは、どのようにして日本語総合目録の業務を進め、図書の寄贈を受けた図書館がより効率よくしっかりと日本語蔵書データを作れるよう協力するか、そして CALIS の日本語総合目録を利用して撚り広い範囲に寄贈図書のデータを掲示し、より多くの読者に効率よく検索と利用をしてもらう方法についてです。次に、340 万冊以上の寄贈図書が 50 館以上の大学図書館に分散していますが、もしこれらの図書館が連携できたら、本学の日本学研究や日本語教育などを専門とする教員も利用でき、寄贈図書の内容をより詳しく掲示する基礎を作れば、東洋文庫にも似た日本学研究仮想文庫ができるかもしれません。この取り組みの展開を希望される図書館があれば、喜んで協力します。